

F13-Y89-10a



1200500764246

3
89
10a



始



F13
Y89
10a

源賴朝



吉川英治



朝日新聞社刊

910
79

源頼朝 下巻目録

蓬壺の人

三

老将

三

夏隣り

三

雨地月天

六

水禽	三五
兄と弟	二四一
乳母の子	二六四
新府繁昌記	二七一
駒	三〇一
榮華散落	三二六
野性	三四一
途中の人	三五三

石橋山	七
碧血	二七
船出	一三六
一羽の雁	一五〇
鎌倉へ	一六二
隅田川	一七五
忘驚の人々	一九
鶴ヶ岡	二三

源 賴 朝

下 卷

名馬	三五
木曾殿	三六
馬筏	三九〇
一路通天	四二
讒者	四〇〇
斷崖	四四二
獨愁	四六五
同根相剋	四八四

蓬壺の人

西八條の清盛の別邸も、この秋ばかりは寂としてゐた。八月、重盛の病が重つて、たうとう四十二で死んでから入道相國のさしもの元氣も、いたく衰へて來たかに見えた。

「……秋だなあ」

入道は、一室から沁々と、眼を千種の秋にやつてゐた。園内に蓬を多く植ゑてあるので、そのこの室を蓬壺と稱んでゐた。

「わしも六十を二つこえた」

自分の老齡を、かう心弱く、自身で肯定したりするやうになつたのも、重盛を亡くしてからであつた。

常日頃は、何かの弾みに、子や一族共が、

『もはやお年ですから』

とでも口を閉せると、

『ばかなつ』

と、すぐにわざと若々しげな聲を出してみせる入道であつたが、この秋は、そんな聲も蓬堂に聞かれなかつた。

相變らず、抹香のほひや讀經は嫌ひである。重盛の死をこれほど悲しんで力落ちしてゐながらも、持佛堂に籠つて一片の讀經をしたためしはない。

『よい子だつた。わしにとつては片腕であつた』

と、人前もなく、泣いたりするが、回向はしてやらないのである。

そのくせ、剃髪して、淨海入道となり、身にも法衣を着てゐるけれど、それも彼にとれば矛盾でも何でもなく、

『白髪を蓄へてをるよりも剃り下ろしたほうがきれいである。嚴めしう衣冠して窮屈にゐるよ

りも、老の身には日常も法衣のほうが手軽くて便宜である』

と、いふであらう。

しかし彼の抹香嫌ひは、佛法の根本原理に異論があるわけでも何でもない。彼の眼に耳にして來た今の佛者の形に對しての反感だつた。若い頃から頑固に抱いてゐたそれが、老ても猶、強くこびりついてゐるのであつた。

(——世に入道相國の御意のまゝにならぬ事は一つもあるまい)

と、世上の人々は云つてゐるさうだが、入道自身の身になると、

(——世に自分の思ふ事は一つだに思ふやうに行つてゐない)

と、嘆じたほどだつた。

山と寺がその一例である。叡山と三井寺にかたまつてゐる僧徒の勢力である。彼は明雲僧正などを巧にあやなして、表面そこをも事なく抱擁して見せてはゐるが、實は事毎に、腹の蟲をころしてゐるので治まつてゐるだけだつた。

入道が、入道としての、面目を發すれば、彼等の伽藍堂塔は一夕に焼きつくして、一物の金

泥や金欄も残さない焼跡の灰の中に、

(これがほんとの佛だ)

と、たつた一つの阿彌陀如来をすゑて見せたら、さぞ胸がすくであらうと常に思つてゐるほど、その勢力と扮装に、内心唾棄したいほどのものを抱いてゐるのだつた。

何にせよ、叡山や三井寺の徒は、兵力と財力と、信仰の力とを擁してゐるので、入道の力を以てしても何うにもならないものがある。武力や財力にかけては、

『見戯に等しいもの』

と、入道も軽く見てゐられたが、信仰の力となると、これは自分の持たないものであることを、入道もよく辨へてゐた。——信仰どころか、一世の悪評一身にあつまつてゐる現状をも、

——入道は決して知らずゐるわけではない。
けれど、彼がそのやうに忌み嫌つた腐敗墮落の末法の世界の他に、眞實の佛教を、草間かくれの清流のやうに、年來、黒谷の吉水禪房でさけんでゐる法然といふ僧なども在ることは、入道も知らなかつた。

入道はその活眼で、一面實によく世上を觀てはゐるが、一面やはりどこか抜けてゐる所もあつた。蓬壺の主人は、やはりもう今は貴族で、庶民のひとりではなかつた。

入道に云はせると、
(余は宗教を憎むのではない。誤つた信仰を唾棄するのだ。信仰もよく導けばいいが、今のやうに、一般社會に及ぼす弊風の大や、朝廷をも動かす悪因習は、是を默視してゐるわけにゆかない)

入道の佛徒嫌ひは、さういふ達見から來てもゐるが、元來か感情の度の昂い、赤裸な性行の人だけに、それが現れるところのものは、人をして頗る恐れさせたり聲響させるやうな形になつた。

たとへば、こんな一例がある。

春の頃からひどく旱魃の打ちつゞいた承安四年の事、清涼殿で雨乞が執行はれたが、誰か祈

禱にあたつても、一滴の雨も降らなかつた。

すると澄憲といふ山門の僧が、最後の祈禱を勤めたところ大雨が降つた。三日三晩降り通して、加茂川もあふれるほどだつた。

『まづ澄憲ほどな名僧は近代にあるまい』

『道がではある』

萬民みな、彼の通力を賞めたへ、その名聲はいちどに鳴り互つた。

『呆れたものだ』

ひとり嘲つてゐたのは蓬壺の淨海入道のみであつた。

『さん／＼薬や醫者でこぢらせた病人が、もう駄目といはれると、生死の煩惱も離れて、諦めの境地に入る。ふと、その心境から病魔が脱する。そこへ薬を盛つた醫者は、幸運にも、起死回生の名醫といはれる。——春の頃からのひでりを、もう梅雨頃と、空あひを見て禱り出せば、たいがい雨に間に合つてくる。——それを佛力だの神通力だのと——信じる者も信じる者だし、澄憲などといふ狗鼠坊主もいゝ加減なものではある』

それが山門に聞えたので、澄憲をはじめ、一山の怒りは、淨海入道にふりかゝつて、

『上御一人までが、百姓のため、宸襟をなやませられてゐる事を、彼は、われのみの榮華に

驕つて、かくの如く、民衆のためなど念頭にもしてゐない』

と、誹謗した。

朝廷の臣も、民衆も、忽ちその聲に和して、六波羅殿の無情を怨むので、淨海入道は、それに打つて返す手もなく沈黙してしまつた。云ひ負かされた形で終つてしまつた。

死んだ重盛も、よく父の入道を云ひ負かしたが、清盛はまつたく口下手であつた。彼はいつも宣傳戦で打負かされる男だつた。その爲に、遂に、自分の正しさが理論で受け入れられなくなる。

『やつてしまへ』

と、六波羅の精兵をさし向けてもの云はすので、庶民の同情は少いし、朝廷の百官からも、『暴虐なる人』

と眉をひそめられ、そのたびに陰口されるのが、彼の私的生活だつた。

六波羅いつたいの經營や西八條の別荘の華麗庵大などは、云ふにも足りないとしてゐたが、まづ政權の專横ぶりだの、一門を以て高位高官の位置を獨占してゐるのが、何といつても、人のそねみを大きく買つてゐた。

もつとも藤原氏もその全盛期には、思ひきつた閥族の獨占をやつたが、入道は同時に、兵馬の權をも把握してゐたから、その勢は到底、

この世をばわが世とぞおもふ望月の——

と、歌つた藤原道長などの比較ではなかつた。

彼の家弟資盛は參議に、頼朝は權大納言に、子重盛は近衛大將までに——云ふも煩はしいが、公卿に上つた者十餘名、殿上人と稱される人三十名の餘をこえ、平氏一門の受領國は三十餘ヶ國。——そして入道自身は、これも藤原氏の悪い外戚政策を倣つたものと思はれるが——わが妻の妹、建春門院から出ました高倉天皇を擁立し奉つて、その高倉天皇の中宮に、女の徳子を納れ、こゝに臣下でありながら、天皇の外戚といふ關係と、武家でありながら政權も握つてゐるといふ、まつたく特殊な位置とを、身に併せ持つて來たのであつた。

必然に、世の人々のそねみは、平家一門の榮華を見て、

(いつかこの反動が)

と、そのの來ることを密かに待つやうになつた。

口に出さないその憎しみは又、一門の誰彼がした事でも皆、

(入道殿をかさにきて)

と、清盛の罪業に數へたてられてしまふと云つた風潮であつた。

曾つて——もうだいたい以前の事ではあるけれど。

重盛の子の資盛が、往來なかで攝政の藤原基房に出會つたところ、資盛が車から降りて禮を
しなかつたので、當然、彼より身分の高い攝政家の從者が、

(なぜ、禮をなさらぬか。小松殿のやうな賢者の御子息でありなら、途上の禮もお辨へない筈
はあるまい)

と、咎め立てた。

——それを清盛が聞いて、

(わが孫を往來中で辱しめたのは怪しからぬ)

とて、暴兵を向けて、さんざんに攝政家へ仕返しをした——などといふ事が、どうした誤りか真しやかに巷間に云ひ傳へられて、それなども、彼の驕慢の一つに今以て云はれてゐるが、事實は、甚だ違つてゐるのであつた。

仕返しをやつたのは、事實であるが、それをさせたのは、入道ではなく、資盛の父の重盛なのである。

入道殿の御子に似あはぬ君子である、賢者であると、院中にも世間にも、平家のうちでは評判の専らよい重盛のした事であつたが、事件の形から見て、

(あれも入道殿の仕業よ)

と、臆測がすぐ眞をなして、誰も、君子風な重盛の人品を、疑つてみる者もないのであつた。そんなふうには、重盛ばかりでなく、宗盛の所行でも、維盛の落度でも、悪いことは皆、入道

のせりになつて、時には耳へも聞えて來たらうが、入道は、子煩悩な上に、總じて骨肉の者は甘いので、

「仕方のないやつ」

と、苦笑するに止まつてゐた。

身内びいきは、入道の大きな短所にちがひなかつたが、それは彼が、幼少から余りに飢寒を骨身に知つて來たせるであらう。貧窮を極めた一家が、世間からひどく虐げられて來た時代に成長した骨肉愛の延長と、彼の人いちばん強い煩惱の一面とも觀られるものであつた。

——と云つて、彼の志や慾望が、彼の私生活に見られる如く他へも小乘的なものかといへば、なかなかそんな入道でない事は、彼が前人のやれない政策でも、よいと信ずれば、信念をもつてやり通して來てゐるのを見ても窺へる事である。

彼が政治をやり出してから、支那宋代の文化が活潑に流入して來た。物資ばかりでなく、宋代の歴史經濟の書物などもとりよせて、朝廷へ献上したりしてゐる。瀬戸内海の航路を開いたり、兵庫港を築修して、和船宋船を賑はしたのも入道の力であつた。

その兵庫港の築港をつくる時も、人柱を沈めなければ、海底の礎石がすわらないといふ工人たちの愚を笑つて、石に經文を書かせて沈め、經ヶ島を築きあげて、

(どうだ)

と、迷信を打破して時人へ示したのも入道であつた。

その筆法で、寺社の領土を没取して、僧兵の勢力を削らうとするのも、入道の方針だつた。明らかに、それ等の事は、國家に貢獻する所のある政策だつたが、よい事は、世人からはれなかつた。すべて彼の私生活と、權力のあらはれに對する反感で消されてしまつた。損といへば損な人、不徳といへば不徳な人、いづれにしても入道の心事には、寂しいものが一抹常に横たはつてゐた事は争へなかつた。

四

ひとしほ寂しさの身に沁みる秋ではあるし、重盛を亡くした後の氣落も來てゐるせるか、入道はいつになく、獨りあれやこれと思ひめぐらして、

「噫——」

彼らしくもない嘆息をついた。

そして、われ知らず頬をながれるものも拭はずに、蓬壺の園にすたく晝の蟲に心を沈めてゐると、どた／＼と廊を早足に渡つてくる聲音がした。

入道は、あわてゝ眼を拭ひ、常よりもかへつて恐い顔を作つて、

「誰だつ。靜に歩めつ」

と、叱つた。

「わたくしです。早くお知らせしなければと思つたので、つい……」

子息の宗盛と——入道には孫にあたる——資盛とが、揃つてそこに兩手をつかへた。

「なんだ？ 慌しう」

「父上。……こゝにをる資盛が、當然うけ繼ぐはずの越前の所領が、兄重盛が死んで間もない

のに、何のお沙汰もなく、没收と、仰せ出されました。お聞き及びでございますか」

「何、重盛の所領を」

蓬壺の人

「嘘かと思つた位ですが、糺してみたところ、誤りのない事なのです」

「……さうか」

努めて冷静であらうとしたが、入道の顔いろは抑へきれないものに變つてゐた。

『そればかりではありませぬ』

宗盛が、なほ圖に乗つて、告げ口しかけると、

『うるさいつ』

入道は、吠えるやうに叱つて、

『つべこべ云はんでもよい。又、例の鹿ヶ谷だらう。退がれ。退がつてをれ。——だが、歸るなよ、あちらに控へてをるのだ』

彼を大膽とか不敵とか世の知らぬ人は云つてゐるが、事實は小心といつたはうが當つてゐる。激發しさうな感情が抑へきれなくなると、身を揺がすのである。——重盛などは生前よくそれをたしなめて、

(大政入道ともお成りあそばしたら、むかしの貧乏ゆすりの癖はおやめなさい)

と、注意したものであるが、彼の持前は死ぬまで止みさうもない。そして額から頭にかけて、膨れた血管が現はに見えてくる程になると、もう坐つてもゐられなくなるらしい。褥を立てて室のまはりを歩きはじめると、

もつともその憤りも、落雷のやうに怒發してしまへば後はさつぱり氣も舞れる性であるが、彼とても理性はある。いやその位置の重い人だけに、人いちばい自分の激發が呼ぶ結果もよく辨へてゐた。

今もさうである。

彼は、面上一杯な憤懣を、紛らはす氣か、鎮めるつもりで、廊へ出たり、欄へ立つたりしてゐるが、次第にその姿は、檻の中をめぐる猛獸にも似て來て、呻いたり、首をあげたり、ぐるぐる廻つたり、傍目にはまるでをかしいやうな狂態を現はして來た。と思ふうちに、彼は、『居らぬかつ。宗盛つ。——宗盛つ』

と、近くの室にゐる侍たちは、膽をつぶして度を失ふほどな大聲で彼方へどなつてゐた。

何事かと驚いて、宗盛や資盛もあわてゝそれへ見えるし、侍たちも擧つて、廣縁の一方へ畏つた。

すると入道は、

「福原へ赴かう」

性急に行ひ出したものである。

「——都はおもしろくない。事々に気が滅入るか焦立つか、生命の樂しまぬことばかりだ。福原の莊へ赴いて、遊び船を浮べよう。夜は、宗盛が舞を見、敦盛に笛をふかせ、資盛の鼓を聞かうよ。——直にだぞ。支度々々」

もう入道は、室をすてゝ、先へ歩み出すのであつた。

答へる間もあればこそだ。侍たちは走り出で、右往左往、

「お出ましであるぞ」

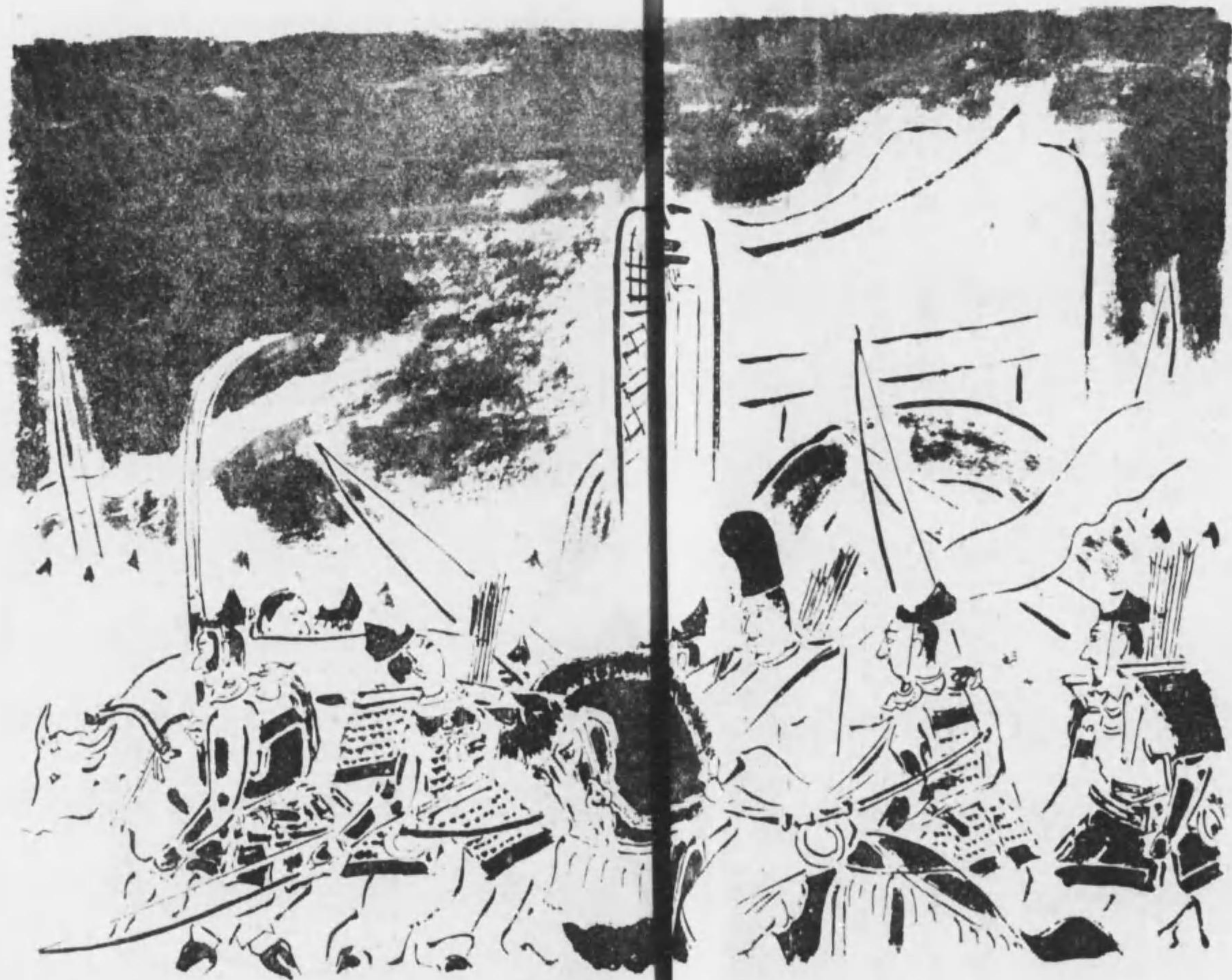
「御車の用意」

と、供觸れして馳ける。

これから福原へ行くには夜をとほして明日の朝にならう。松明の用意も要る。少くも五百人や七百人の武者は従いてゆかねば物騒でもある。——爲に、その慌たゞしさと云つたらぬ。が、入道は斟酌もない。はやくも引出された車の中に移つて、掻き出すのを待ち遠しげに坐つてゐる。そして、

「宗盛も行け、資盛も行け」

と、いつたふうに、その他の家族たちをも至極簡単に名ざして、後から思ひ出すまゝ云ふ。入道の氣もちとしては、誰も行きたからう、彼も遊びたからう、孫や女どもへも、歡びを分けてやる氣でいふのであつたが、女たちも孫たちも、いや一族の誰でもが、入道と同行するのは餘り欣しい事としてゐなかつた。氣づまりで窮屈で、もし御機嫌でも損じれば大變だし——折角、福原へ遊びに行つても、身にも皮にもならないと一致して陰でこぼしてゐるのである。そんな心理は、入道は少しも知らないので、



『みな乗つたか。何：：まだ化粧してゐると。化粧などは、車の中でいたせばよいに』
と、獨り上機嫌になつて——いや努めて機嫌よく氣を取り直さうとして、簾の内から、從者
に任せておけばよいやうな事まで、自身で世話をやくのであつた。

漸く支度が揃ふ。

十輛に餘る牛車が西八條の門を出た。侍女や女童の文車だの、弓長刀を持つた側臣だのがつ
づいてゆく、大路へ出ればいつのまにか、前後に騎馬武者と千人近い兵がそれを護る列となつ
てゐた。

攝津の福原の別荘は、兵庫の海を園の前に、逆瀬川の水を殿樓の階下にとり入れてゐた。そ
こでは、都の白拍子や浪花の名ある遊君をあつめて美船を浮かべ、網を打たせ、夜は萬燈を廊
につらねて、教盛が笛をふいたり、宗盛が舞つたりして、ついこの夏頃も、一門の公達がその
風流やら藝事などを競ひあつて、入道相國に

——夏の夜は短い。

と、託たしめた事もある。

たゞひとり、この夜の歡樂にも見えなかつたのは、もうこの頃から體も悪かつたが、快くて
もいつでも嫌だと斷る——長男の重盛だけであつた。

世間から君子と見られ、又、燈籠の大臣などと稱はれてゐる重盛が居ると、入道相國は誰よ
り煙たがるくせに、その重盛が座にゐない時は、やはり何か淋しいとみえて、

『あれは獨りで何してゐるか。又こよひも、堂籠りして經でも誦んでゐるかな。それとも、時
鳥でも聞いてゐるだらうか。變り者ではあるよ』

などと、宴の半にも、自身から問はず語りを洩らしたりするのであつた。

六

福原へ行くときさへいへば、一門の公達や女人達は元より、もういゝ年配の息子たちまで、遊
ぶことしか考へてゐなかつたが、入道の肚の内には、兵庫の津からその地方一帯に互つての、
大規模な港を擁した都市計畫の設計圖が描かれてゐた。

入道は、以前から、

蓬壺の人

（もつと海外との交易を盛にして新しい文化を入れ、自分の榮華を、自分一門のみでなく、庶民の中の繁榮ともさせたい）

と、抱負してゐた。

宋船との交易を盛にするには、良い港が必要なので、築港の工事を起し、それと共に、都市の計畫にかゝつたが、彼の設計圖には、多分に、政治的な考へも入らずにゐなかつた。

又平家の恆久的な利益もその中へ織りこまずに居られない入道であつた。

（いつその事、福原へ遷都すれば總てにいゝ）

いゝ——といふのは、自己を中心としての考へであるのだが、入道は、その位置、その權力の上に、いつのまにか自己も公人も混同してゐた。自分の考へをその儘政治に移すことの危険をさう人ほど反省してゐなかつた。だから、政治を執る者には稀れなほど、彼の政治には、彼の感情までが——何の包装もせず露骨に現れて來たりした。

なぜ入道が、福原へ遷都するのがいゝと考へたかといへば、彼にとつて、實に、誰よりも長い——そして苦手でもある、公卿たちが、やゝもすれば三井寺や奈良などの僧團の勢力とむす

びついて、

（折だにあれば——）

と、平家打倒を畫策してゐることが、多年のいろいろな事件や紛糾でも分りすぎてゐる程なので、

（それを切離すには、京都といふ因習の都を捨て、新しい都會と文化の中に總てを遷すのにかぎる）

と、立案したのであつた。

そしてどしどし、實現へうつし始めて、政治機關の一部さへ、今では福原にあるのである。

海外との交通を促進したり、誰もが認めてゐる僧徒の武力や政治運動に對して、それを撓める工夫をめぐらしたところは、大いによいし、國家的な正しい政策ともいへるが、その創案の根本は、何よりも平家一門の安泰の爲にあるといふ事は、誰でもすぐ觀破できるので、

（福原へ遷都などは以てのほかである。いつたい何の必要があつて——）
と、罵々たる反對や不平を招いてしまつた。

藤原氏などの遺口なら、

(一門の榮華を固める爲ではない。國富のため又、庶民のための國策である)

と、政治らしい政治として發表するであらうに、入道は、そんな上手もなく、まだ龐大な地域には、桑田もあり、鹽焼く海女の小屋もあるうちから、もう宏大な一門の別荘などを建て出したものである。

それもまだいゝが。

政治機關の一部を移すのと同時に、孫や子や一門の子女など伴つて來たり、浪華や都や遊君等のよい出先とするに至つては、いかに入道が、自己の煩惱と、國政とを、混同してゐる頭の持主かがよく分らう。

いつたい入道の頭腦といふものは、時の公卿や僧侶には見られない大理想も革新的な考へもいつばいにあつたが、よく窺ふと、その大脳と小脳には壁がなかつた。仕切のない大廣間みたいな頭らしかつた。

「何を思はれたか、入道殿には、遽に福原へ赴かれたさうな」

と、洛中に沙汰されてから、およそ一月餘り後の出來事であつた。

それは十一月七日の夜、戌の刻とおぼしき頃だつたとある。

宵から雲の断れ目は晝のやうに明るく、冬の夜といふのに、妙に温い風がふき捲つて、往來の乾いた土ほこりが、戸毎の燈火へ赤く霞んでゐるが——そのうちに乾の方からぐわつと地鳴が聞えて來たかと思ふと——もう大地は發狂したかの如く震れに震れ洛中の人家九萬餘戸、大地震の慘害に見舞はれてゐた。

幸に、死者や民家の被害は、思つたほどでもなかつたと分つて、數日の後には、人々もややほつとして、災後の始末に奔命してゐるが、陰陽師の安倍泰親は、

「占文の示すところ、たゞ事とも覺え候はず」

と、例によつて易經をひき、傳奏まで書を上す折にも、ひとり嘆息して涙をながしてゐたと

聞えた。

『また、この上にも、これ以上の災害があるとは、いつたい何んな天變地異が起るのか』
と、易を信ずる者は色を失ひ、同じ公卿でも、さう信じない若い人々は、

『怪しからぬ泰親が泣言かな』
と、笑ひとばした。

するとその月の十四日。

『たいへんちや』

といふ聲がどこからともなく聞え渡つた。何が大變か、よく分らない殿上人たちが専ら先に騒いでゐた。

下部の者を町へ見せにやつても、

『何と聞分けた事もござりませんが、たゞ町中も凡事ならず上下騒ぎ合つてをりまする』
とのみで、真相は皆目知れなかつた。

然し、長い間ではない。——やがて大變の實相は續々参内してくる朝臣たちの口から知れた。

わけでも、關白基房などは、眞つ蒼な顔色を持ち、足許も危ふげなばかりあたふたと参内あつて、

『福原の入道相國には、何を又、思ひたがへたか、物々しう軍馬を呼びあつめて、彼の地より入浴あるとの報せである』

と、顫きながら披露した。

入道を極度に怖れる者は、百人が百人まであつた。だから入道を忌み嫌ふ者は、百人のうち九十の上もあつた。

けれど怖れながらも、ほんの一部には、彼の一面を知つて、嫌ひでない者もゐた。もつと今の位置にゐて、陽氣な政治を布いてくれてもいゝと考へてゐた少數の者もゐた。

さういふ人たちは、かくと聞くより、さつと顔いろを變へて、

『さても、御持病の痲痺がなせる業には違ひなからうが、そら恐ろしい事を口にし給ふものよ。先頃の地震に、心の支柱をとり外し、氣でも狂はせ給ふたか』
と、惜みもし、慄きもした。

『ゆめ、厭はしい事を目に見ないやうに』
浴中の庶民まで、神々を念じ合つてゐるが、遂に、淨海入道の狂暴は、都の中に事實となつて現れ出した。

入道は自分を自分で火の車にのせ、火焰の中から常識の人にはあるまじき指圖をした。法皇の近臣三十餘名の官職を剝ぎとり、前關白基房をはじめ、藤大納言實國や按察大納言父子など、次々に都から追ひ出して、遠國へ流してしまつた。

『何たる悪行ぞ』

もう百人中の一人も、入道の支持者ではなくなつた。

老将

一

ひどく咳が出る。出始めると又、容易にをさまらない咳であつた。

『閉めよ。……誰ぞ、その妻戸を閉めぬか』

咳きの中から苦しげに、源三位頼政は云つた。

小侍が走り出て、

『お閉めいたしますか』

と、念を押したが、訊かれるのさへ、息苦しうに、

『ウむ。……むむ……』

顔きながら、厚紙を唇に當てた儘、しばしは口をきゝ得ない。

もう四月である。邸のすぐ裏を、今年の花も、加茂の水は日毎に流し去つて、若者たちは、衣更してゐる。

——もう河風も冷たくはなからう。

冬のやうに閉ぢ籠つてゐた頼政は、稀に世間の空も見たくなつて、さつきから庭ごしに、河原の水や、京の四山の若葉を見てみるうちに、もう老骨に風が沁みて、咳が出る。水洩が出る。

老将

「せひもない。わしももう……」
獨り年輪を思ふ。

彼は、七十七になつてゐた。

年ばかりではない。この住居も古びた。平治の亂から二十年、近衛河原のこの邸に、土龍のやうに住んで来た。——頼政はさう思ふ。土龍のやうなと吾ながら思ふ。

何といつても、義朝が六條に榮えてゐた時代は、彼も源氏の名門の一として、共々華やかに暮してゐた。

では、なぜ平治の亂に、その義朝へ協力を約してあるくせに、合戦が起ると裏切つて、身源氏でありながら六波羅へ奔つて清盛へ味方したか。

そして戦後あんなにも澤山な源氏方が、毎日のやうに、目のさきの河原で斬られたり、各地で掃滅されてゐるのを見ながら、のめのめと、自分のみ助つて来たか。

臆病者よ。

侍にも似げなき人間よ。

禽獸にもひとしい。

禽獸でも恩は知る。情はある。

人扱ひすな。

武門の生れ損ひよ。

あらゆる蔑みの言葉をもつて、源氏を惜む人々は云ふ。いや、平家の武士たちも擧つて云ふ。それから二十年。彼はその中にじつと生きて来た。

何をいはれても黙々として。

が、彼は、自分の胸には獨り慰めも持ち、毅然たる信念も抱いてゐた。

なる程、平治の亂には、はつきり義朝を捨て、六波羅へ加擔した。一族を裏切つた。

けれど、それは武門の道を踏み違へた事にはならない。たとへ一族へ弓をひいても、國家の大本へひく弓ではないからである。

義朝を初め一門の不覺は、源氏の興亡にばかり武者ぶるひして、國家の大本に思ひを怠つてゐた事にある。敗北の因もそれと云つてよい。

清盛はさうでなかつた。——晩年の行状とは人がちがつてゐるやうな頭腦だつた。——彼は、都の亂と聞くと、熊野の途中から引き返し、わづか五十騎ばかりで六波羅の邸に入ると、すぐ計略をめぐらして、兵亂の中から上皇と天皇の御輦を自分のほうへお迎へし奉つて、その上で戦を開始した。

——何であの時、引く弓があらう。源氏といひ平氏といふも、私名である。ほんとの弓取の立つところは、私名の中にはない筈だ。

『自分は天地に恥ぢない』

頼政は、今も、さう思ひ乍ら、二十年、無言を通して來たその唇をかむのであつた。

二

世の人々は又。

（——彼が平家に隨身したのは、平家の榮華に隨身したのである。節義を賣つたものだ。さもしい武將ではある）



といふ見方から今にも頼政が恩爵にあづかるであらうと、平治の亂後、清盛以下の六波羅一門が、爛漫と咲き華やく榮進ぶりと共に、彼への御沙汰をも注目してゐたものだつたが、頼政は心のうちで、

（否とよ。不遇は覺悟のまへである。死ぬ以上生きるは辛いと知る身に、何の待つものがあらう）

と、ひとり答へてゐた。

けれど遺に、

（若い仲綱や兼綱や、又われに従ふ家の子等は、不愍なものだ）

と、息子や郎黨たちが、共に肩身を狭く世間の端に住んでゐるのを、憐れまずにゐられなかつた。

恩爵はおろか、邸宅も扶持も、むかしの儘だ。入道相國をはじめ平家一門が、その端くれに至るまで、爵位官職を私して、全盛の餘澤に驕り、猶まだこの世に不平をさがしてゐる中にも、頼政だけは、忘れられてゐた。近衛河原の古邸にたゞ一軒、置き残されたまゝだつた。

稀々、思ひ出されても、

(裏切者のよい見せしめ)

とのみで、榮華の閑は一顧も與へなかつた。そして平家人の頭には、何年たつても、

(彼は源家の人間だ)

といふ觀念も除かれなかつた。

それ位だから、長年、禁門の衛府にありながら、彼のみは、昇殿もゆるされなかつた。

若年から御所の衛りに立つ弓取の身として、それだけは頼政も、痛恨事としてゐたとみえ

て、或る時、殿上の人に、所懐の和歌をそつと示したところ、帝のお耳にはいつて、

——あはれな心根、昇殿をゆるしてやれ。

との有難い御詔に、初めて彼も階を踏むことができたのであつた。

その時、頼政は一晩ちゆう、君恩に感泣して、

(いつかは、この老骨を朝廷の御爲に——)

と愈、大君の防人たる武士の本道を意志につよめて、同時に、

(犬ともよべ、畜生とも誹れ、われはわれの勤むるところを勤めて後の世に問はん)

と、なほ老後を養つてゐた。

さういふ彼に對して、平家一門の中で、たゞひとり、ふと同情の眼を寄せた者がある。

(あれも七十にもなつて、まだ下位に留まつてゐたのか。さてさて氣の毒した。三位にでも敘せてやれ)

思ひ出したやうに、遽に、さう云つたのは、清盛であつた。

入道相國の恩命も、餘りに遅きに失してゐたが、たとへそれが一片の出來心でも、年來不遇な頼政には、欣しかつたに違ひない。

(入道殿も本來は、近年見るやうな人物ではない筈だが、餘りに恵まれた順調と周りの一門に誤られてゐる。——その誤りが入道殿の一身や一族だけの誤りで済めばよいが)

頼政は今でも、人間としての清盛に一片の愛惜を感じてゐる。彼を誤らしめたくない氣持を抱いてゐる。けれど何うにもならないものが遂に入道を、世間から「物狂はしき人」と呼ばせるところまで持つて來てしまつた。しかし頼政から見ると、彼をそこまで有頂天にさせたのも、

一半の罪は、非難する世間にあると考へられるのであつた。——で、曾つては自分に寄せられた一片の氣の毒さを、今では頼政から入道へ思ひ遣つてゐる程であつた。

三

裏門の戸をたゞいて、

「御子息の仲綱殿にお目にかゝりたいが、居られますか」

と訪れた色の黒い——顔半分髷に埋めてゐる山伏があつた。

日陰日なたのそこらの地上に、毛蟲が這つてゐた。——耳をすますと、頼政の咳きが、庭木の奥の古い棟から聞えてくるほど、そこ母屋は近かつた。

「誰だ？」

小舎人が中で腰をのばした。紅い櫻の實を烏帽子のなかへ拾つてゐるのたつた。

「新宮の山伏が、祈禱に参じたと仰つしやつてくれゝば分るが」

「こゝは、入口ではありません。御當家になつて、表門はちやんとある。あちらへ行つて、訪

うたがよい」

「いや、庭門を入つて、南の空地に向いてゐる小門を叩けと仰つしやつた。その門はこゝであらう」

「誰が仰つしやつた？」

「仲綱殿が、お手紙の中に仰つしやつた」

「あ。では新宮から、わざ／＼お招きした山伏どのか。……では大殿の御病氣のお加持にでも」

「左様でござる」

取澄してゐると、小舎人は、あわたゞしく馳けて行つた。やがて頼政の子息の仲綱が自身でそれへ來ると、

「おう……これは」

とのみで、お互ひに多くも云はず、黙々と木戸を開け、木戸を通り、邸の内のどこかに姿をかくした。

それからだいぶ時刻を措いて、仲綱は父のところへ來て、聲密かに、

老將

『新宮十郎行家どのが、旅からお歸りになりました』と、告げた。

すぐ後から山伏の行家がはいつて来た。

頼政は、顔をながめて、

『黙つてをられたら人違ひするほど、姿も顔もお變りになつたなう。……して、諸國の様子はどんなふうでござつたか。伊豆へも参られたか。配所にをる頼朝様にもお會ひなされた事であらうな』

待ちかねてゐた人であらう。頼政はもう咳もしない。憔悴してゐた顔色にも、近頃のない元氣を取もどして、矢つぎ早に、訊ね出した。

『こゝは、何を申しても、おさしつかへない所か』

と、行家は仲綱へ、室外の氣配を糺してから、それに答へた。

『西國は歩きませんが、都から東北はみちのくの近くに至る迄、殆ど限なく遍歴しました。伊豆をこえて、亡き頭殿の遺子——此行家には甥にあたる頼朝が成人ぶりも見届けました。宮

の御密旨もそつと傳へ、同所の北條時政とも語りました。ほゞ彼の地方の下固めはできてをるものと見てよからうと存ずる。——その他、坂東、木曾、北陸の諸國にも、事あらばと待つ者が、どれほど、嘔を装つてゐるか知れませんが……たゞその聯絡がないだけです。又、頼朝をのぞいては、敢然とひとり眞つ先に起つて、旗を擧げるほどの勇氣と力には缺けてゐるだけのものです』

『その人々は』

『申しきれないほどの數です。後で自分の書いた物でお示し申さう。猶、歩き洩れた地方もあるなれど、昨年来、淨海入道の暴狀は日に募り、いよいよ地方の武家共に、平氏討伐の念を固めさせて来たので、機は今ぞと、立ち歸つて来た次第です。頼政殿、もうこれ以上待つものは何もありません。後は、もういちどそれがしが伊豆へ打合せに下ると同時に、あなたが起つまでの事です。——時にあなたのお心構へももうできて居りませうな』

夜霞がたちこめてゐた。若葉の陰の月までが濡れてゐる。四月九日の夜半、三條の大路に人影もない。

「すこし待て。すこし……」

馬上の影が、先へゆく駒をよびとめた。

——何用かと振向くと、後なる古直衣の老武士は、手綱を抑へたまふ鞍つばへ屈みこんでゐる。——ごほん、ごほん、と體ぢゆうを揉んで咳入つてゐるのである。

「父上、お苦しうござるか」

嫡子の仲綱が駒を返しかけると、

「行け、行け。……なんの大した事はない」

と、頼政は顔を振る。そして仲綱におくれじと又急いだ。

三條高倉に、大きな森とも見える一劃があつた。後白河法皇第二の皇子、以仁王の御所であつた。先に來てゐた行家は、御所の小門のはうに佇んでゐたが、急いで——と手を振つて知らせ、なほ四邊を見張つてゐた。

頼政父子は、御所の内にかくれた。——それからの事は誰知るよしもない。後に思ひあはせれば、宮に調を賜はり、平家討伐の事や、諸國の源氏へ参加の令旨を下さる事など、夜もすがら頼政父子と、謀し合せてをられたかに思はれる。

宮の御不遇にある事は久しかつた。平家の専横に依ることはいふ迄もない。

不遇な老將頼政の胸と、不遇な宮の御心とは、いつか同じ志にむすばれてゐた。

「引けない弓矢を捨て、二十年め、今こそ引く弓矢を取れと、天地がわたくしへ命じてをります。——あはれ八十になんなんとする老將頼政の力では、腐え朽ちたる六波羅といへ、覆へすには至りますまいが、わたくしが起てば諸國の源氏が奮ひ起ちませう。世革めの真先に、討死せば、この老骨に花が咲くといふもの……」

頼政は、さう眞情を吐いて、宮の御決意をうごかし奉つたのであつた。——ゆめ、令旨をただだかう爲の巧言などではないことを、彼自身の心は神へさげんでゐた。宮へさう申しあげた折、頼政は、その老骨をふるはせて泣いた。

新宮十郎行家は、紀州新宮の住人であるが、在京中に、頼政と親しくなり、この計畫にもあ

づかつたので、まづ諸國の動靜を視、伊豆にある甥の周圍なども見届けた上で、去年からの諸國遊歴となつたわけである。

九日の夜の伺候は、その報告と共に、最後の密議が、固められたものにもがひなからう。次の日、十日の夜。

十郎行家は、ふたゝびその山伏すがたを、京の蹴上から近江路へ急がせてゐた。

美濃、尾張と出て、伊豆へはいり、頼朝の配所にも、わづか一夜しか泊まらなかつたが、北條時政とも會して、すぐ又、甲斐、信濃を馳けまはり、更に、その時は脚をのばして、奥州平泉の館に、藤原秀衡を訪ね。そこに成人してゐる源九郎義経ともひそかに會つた。

——が、この旅の間に都では、大きな破綻ができてゐた。

行家の國元である新宮の武士たちの動きから、以仁王をめぐる計畫の全貌が、すつかり平家へ洩れてしまつたのである。

淨海入道は、それを知ると嚇怒して福原から京都に入り、以仁王を土佐へ流さんものと、武將に命じて、御所へ向はせたが、何ぞ知らん、命をうけた武將の中に頼政の二男兼綱もゐたの

である。

彼はまだ、老將頼政が、密謀の張本人とはゆめにも氣づかずゐたのである。——單に、入道はかくの如く半面はお人好しだつたといふだけでは當らない。彼の頭腦はその行狀ぶりの示すが如く、もうその頃から熱病に罹つてゐたものとしか考へられない。

夏隣り

『政子。——政子』

もう妻として呼び馴れてゐる頼朝の聲であつた。

配所の晨は相變らず早い。良人が日課の讀經をつとめてゐる間、新妻は、居室を清掃し、釜殿にまで出て、いそ／＼立ち働いてゐた。

そこも済み、良人の讀經も終る頃と、彼女は、帳の陰にかくれて、朝の身化粧をしてゐた。
 『お召でございますか』

四月の朝の清々しさに、清らかに掃除された室、そこに見る新妻の顔は、頼朝の眼にも、まだ朝毎にめづらしく、そして美しく思はれた。

『——急ではあるが、今日立つて、お許は又、伊豆山の走り湯權現に、しばらくの間、身を潜めてゐやれ。住居は、法音比丘尼の室がよからうが、身の警護は、きのふ使に書面をもたせ、すべて阿闍梨覺淵どのに、おたのみ申してある。……よいか』

『はい』

素直な妻である。

——が、いつもその後で、一言がある。この夫人の聰明は、もう時々、頼朝を壓することがある。

『女子は足手まとひ、いづれはさうと、先頃、新宮十郎行家様がお立ち寄りの時から、おはなしを洩れ伺つて、あらかじめ身仕舞はいたしてをりました。わたくしの事は、お案じくだされ



ますな』

『いや、さうか』

——實は、一時でも別れるといつたら、涙でも見せられはしないかと、頼朝は、話し出すまで、密かに案じてゐたが、かへつて、

(わたくしなどに後ろ髪を引かれ遊ばすな)

と、勵ますやうな妻のことばだつたので、ほつとしたり、何か又、心に足らないものを覺えたりした。

『それと——これも昨日、書面で伺つたことであるが、この二十年亡き父祖恩人たちの供養のため、法華經千部の轉讀を立願し、それが今、八百部まで行を積み、残るところ二百部となつてゐるが……これも早、大事に迫つては、當然勤めてをられなくなつた。……と云ふて折角、これまで懈怠なくお勤めまをして参つたものを、後わづか二百部で、斷念するも遺憾であると思ひ、覺淵御房におはからひ申してみたところ、その志だけで、願意は立つた。わけて、八の文字は吉兆であるから、八百部轉讀でよからうではないか——と仰せられたとある』

政子は黙つて聞いてゐたが、良人がそんな點にまで氣を懸てゐたり、吉兆をよろこんだりしてゐるのを、何か微笑ましく見てゐるといふ風だつた。

修養のひとつとして、彼女も法華經は修めてゐるが、良人の朝暮の轉讀は、そんな立願からであつたのかと、今初めて聞いて、その信仰心にはすこし驚いた。そして自分の心の中には、常識としてはあるが、それ迄のまだ信仰はないのにも氣づいた。

『——就ては』

と、頼朝はなほ云ひつゞけてゐたのである。

『お許が、あちらへ参つたら、覺淵御房にお會ひして、伊豆、箱根、三島の三社へ、頼朝の代りに、素懐の大願成就の願文を捧げていたゞくやうに、お願ひしておいて欲しい。——なほ又、八の吉字に因んで、米八石、絹八匹、壇紙八束、藥八袋、白布八反、漆八桶、綿八桁、砂金八兩。——さう八種の物を、それぞれへ頼朝の名を以て寄進の事も、お計らひを仰いでおくやうに』

『かしこまりました』

『頼んだぞ』

『は』

と、いひつけを受けてから、

『——では、けさの朝餉が、しばらくの間の、おわかれの膳部でございますね』

さすが、別れを傷む新妻らしい眸が見えた。頼朝は、凛として頷いた。

『さうだ。共にむかひ馴れた膳部も、けさが當分のわかれ。……武運つたなくば、最後のものとなるかも知れない。楽しんでいたゞかう』

二

政子のすがたが、配所に見えなくなつた頃から、配所の人出入は急に活潑になつた。しかも夜中の往來が多かつた。

例の、北條家の宗領の宗時をはじめ、佐奈田餘一、天野遠景、仁田忠常、大庭景親兄弟などの若い仲間が、入れ代り立ちかはり、生々した面をもつて大股にあるいて出入する姿が、この

附近の道でよく見かけられた。

北條時政も、時折見えた。

素より、彼の行動は、この地方では大きな目標となるので、いつも微行ではあつたが。

わけて、めづらしい客は、澁谷庄司重國などが、老軀を運んで見えたことである。

——長年、この配所に仕へてゐる佐々木定綱の弟の經高を、こんど養子に入れたので、その挨拶に——といふ事であつたが、

『いつのまにか、世も移つたなう。何せい、若い者の時勢ぢやよ。夏が来れば、夏が来るのを、人間の誰が遮られるものではない。相模ももうそろ／＼夏が近うてな、生々と若い新樹が山野に伸びてをる。——佐々木家の冠者輩といひ、わしの孫義清の妻の兄、大庭景義、景親の兄弟といひ、みな羨ましいもの共よ。——これからだ。これからだ』

そんな事を云つて歸つた。

月がかはると。

京都にある河邊庄司行平から早打が到着した。

夏隣り

行平は、下總の住人だが、ちやうど在京中であつたので、頼朝に、この急を告げることができたのである。

書面の内容は、

以仁王、源三位頼政等のかねてからの準備も成つて、旗擧げの大事も實現に迫つた眞際に、その計畫は、平家の知るところとなつてしまつた。

この大蹶に、事態は急轉直下、悪化を辿つて、三條高倉の宮の御所は時を移さず、平氏の軍兵のとり圍むところとなつたが、その指揮に向けられた判官兼綱は、僥倖にも、頼政の息子であつたので、事前に父のはうへ急を密報しておいたので、頼政は、宮を奉じて、その前に御所をぬけ出し、三井寺へ逃れてゐた。頼政の郎黨共は、近衛河原の主人の邸へ火を放した後、宮のお後を慕つて、馳せ参じたが、何分、もう戦は後手となつて守備が整はないため、そこから南都へ向はうと、僧兵をも加へて宮のお供に立ち、宇治まで來ると、平家の軍勢二萬餘騎が、地の利をとつて包圍にかゝり、弓矢のつゞく限り惡戰苦闘したが、遂に力及ばず、老將頼政もそこに自刃して果て、宮にも、光明山の鳥居のほとりで、敵の流れ矢に

中つて薨せられてしまはれた。

かくて、せつかくの計畫も、一朝に壊滅の慘を見、又しても、平氏輩に「平家に弓をひく者はみなかうぞ」と、いやが上にも、思ひあがらせてしまふ事とは成り終つた——。

無念とも何とも申しやうがない。洛中はなほ戰亂の餘波に騷擾を極めてゐるが、取あへずお知らせする。くれぐれも、自重してたまはるやうに——。

と云つたやうな報告で、その長文の文字のなかに、宇治川で死んだといふ頼政の顔や、幾多の先驅した精靈が、目に見えるやうな氣がした。

その夜は。

頼朝から忍んで、北條家の館へゆき、時政と會つて、夜明け前に、彼は配所へそつと歸つてゐた。

『……噓』

終日、彼はものも云はず、眸にも力を缺いて坐つたきりで居た。

それから六月にかけて。

夏隣り

乳母の妹の子にあたる三善康信やら、その他の京都にある縁者から、次々と、飛信が来た。みな、こんどの大變を細々と書いて、そしていひ合せたやうに、(伊豆とても、安心はなるまいぞ。身を大事に、萬一の備へを)と、それとなく、彼の身邊の危急を注意してよこした。

三

頼朝自身も、刻々と、自分の生命が、もう草叢の陰に、無事をゆるされない危さに來てゐることを、自覺してゐた。

同時に、又。

その危険が、無事の中からはなかく、奮ひ起せない——乗るかそるかの出發へ——勇氣と決斷とを、いや應なく抱かせてくれてゐる事にも、大きな感謝をもつた。

自分の本質は、誰よりも自分が知つてゐる。もしかういふ四圍の狀態が生じなかつたら、美しき新妻との生活に、斷ちきれない未練も持ち、生來の遊惰や閑に馴れた癖がつい意志を鈍ら

せて、遂に、千載の機を逸してしまふかもしれない。——彼は自分の一面には多分にさういふ自墮落のあることも省みてゐた。

さう考へると、危険は、生命の外部の事態よりも、生命の内部にあるものの方が、はるかに危険であつたと思ふ。

——が、もう彼はその心のうちに、果斷をすゑてゐた。政子を伊豆山へ移して、身ひとつになつた心地の朝から、彼はわれながら何か、日頃の凡夫でなくなつた氣がしてゐた。誰もゐない所で、獨り坐つてゐるにしても、その「斷」を膽において、端嚴と威をつくらつてゐた。

(——あなたは源家の統領でお在せば、いかで平家がこれ以上、見のがしておきませうぞ。一刻もはやく、身をもつて奥州へなりとお遁れあれ)

三善康信から來た二度目のてがみには、もう足元へ火がついたやうに書いてゐる。

三浦次郎、千葉六郎など、先頃の事變で、京都へ出向いた者たちも、續々と、歸郷して來るにつれ、皆こゝへ立寄つて、

「頼政の旗擧げに、六波羅の神經は、ひどく過敏になつた。頻々と、東國の平家へ、何やら通

状を發してをる』

と、告げ、それとなく、

『お心構へを』

と、促して行つた。

勿論、かうした空気が、北條の館へも聞えてゐるにちがひない。時政はどう考へてゐるか。容易にうごかない頼朝は、又、容易にうごきさうもない北條時政のはうの様子を、凝と、我慢するやうな氣もちで眺めてゐた。

彼は、自分から北條家のはうへ足を運ぶことを、努めて避けてゐた。時政の態度にも同じ氣づりが見えるからであつた。彼は、口に出してこそ云はないが、

(わしに加擔がなくなれば、御身の力のみでは何もなし得まい)
と、してゐる風がある。

頼朝も亦、人いちばい鋭い感受性に富んでゐるはうなので、暗に、

(余と共に起つのを好まないなら、手を拱いて見物して居よ。又、望みならば、頼朝の敵に

立つて、一箭交してみてもよい。妻は妻。男は男。武門の道に立つては、私情の斟酌には及ばぬことぞ)

と、云はぬばかりな襟度をわざと示してゐるのである。そのくせ、心のうちには、
(彼なくては)

と、時政の實力や門地を、この際の唯一の力とはしてゐるのであつたが。

すると、遂に、六月ももう末頃、時政のはうから眞夜半に運んで來た。

明け方近くまで、聲、男は密議をしてゐた。その席へ家人の藤九郎盛長も、そつと呼ばれた。

暗いうちに時政は歸つた。

夜が白むと、つゞいて藤九郎盛長は、輕装して、どこかへ旅立つた。

——後で分つた事であるが、その藤九郎盛長は、先に山伏すがたの新宮十郎行家が令旨を傳へ歩いた國々へ、再度、頼朝の名を以て、

——時節到來、旗下に參ぜよ

との檄をもつて、源氏の武士を狩出しに行つたのであつた。

「邦通。何してをるか」

頼朝は又、奥の棟へ自分から足を運んで、そこにゐる懸人の藤原邦道へ話しかけた。

「や。殿ですか」

邦通は、女のやうに針をもつて縫物をしてゐた。

頼朝も、それを眺めて、苦笑した。

「そちは、縫物までするか。はてさて、器用な男ではある」

「針を持つ業も、武者の心得のひとつでございます。陣中に洗濯物をしたり針を持つ女の群をつれてゐる場合はようございませうが、それも居ない時は、鎧の袖の綻びや、何かの不自由をどう致しませう」

「なる程。さては其方の舞や音曲のたしなみも、陣中の備へか」

「役に立たない物といつては、どんな時でも何一つないかと存じます。ですから、わたくしの

如き無能でも、當所にお養ひ下さるものと存じてをります」

「いかにも。…時にもう數年前からの繪圖面は、出来上つてゐるだらうな」

「とうに出来てをります。——が、まだあれを持って、お聲のないうちは、あれの要る時節が參らぬものと、てまへの管底にふかくしまひ込んでおきました」

「見せてくれい」

頼朝は、そこへ坐つて、彼の取出した近郷一帶の圖面を見て、非常に満足さうであつたが、

「至急、もう一面、圖を寫してもらひたいが」

「これと同じものを」

「いや、これにないものだ。それは山木判官兼隆の邸の内部。明細にとは望まぬが」

「畏まりました。——しかし、ずるぶん難しいことで御座いますな」

「生命がけの仕事であるの」

「元よりです。けれど幸、山木家の郎黨にも、兼隆の一族にも、てまへは少しも顔を知られてをりません。他國者で、身分のないのが僥倖です。さつそく、取かゝりませう」

その後、どう手づるを求めて入りこんだものか、邦通は例の人あたりのよい辯舌と、遊藝の才を利用して、山木家へ近づき、目代の判官兼隆の宴席になど現れてゐた。

すでに、藤九郎盛長が、頼朝の施行状を携へて、諸國の源氏を狩りもよほしに立つてからは、時政の夜中の訪れは、頻々とかさなつてゐた。

今は、もう起ち上つたのも同じことである。——さうなると、たとへ失敗しても、裸の一流人に過ぎない身軽な頼朝よりは、位置もあり財寶もあり、妻も子も一族も多い——そしてこれから餘生を安穩に樂まうとすれば樂める——時政のはうが非常に躍起となつて來た。

「時政、いざとなつたら、兵はどのくらゐできるか。糧食はどれほど續くか。まつ先に襲せて討つべきものは、山木判官として、その後すぐ、どこへかゝるか」

頼朝は、いつのまにか、そんな事を糺すにしても、敬稱を廢して、

「時政、時政」と、呼び捨てにした。
勇としてでなく、臣下として扱ひはじめた。

時政は、内心、

「この若者、若いに似げなく、なかなか駈引に心をつかふな」

と思つたが、もう彼の立場は、對頼朝との地歩などに、心を勞してゐられなかつた。

それに、時政は、伊豆半國に互る自分の勢力といふものを、かなり大きく自負してゐたが、實際となつてみると、自分と共に、生死を賭すものと信ぜられる數は、極めて尠かつた。まだまだ此地方にも、平家崇拜と平家恐怖の觀念が、大部分の者の頭に、牢固として抜き難い力を持つてゐるからであつた。

雨地・月天

一

秋となつた。

雨地・月天

今朝、邦通はひよつこり歸つて来た。釜殿の者や、厩舎人などに、

『永い事、どこへ旅してござつた？』

と問はれても、にや／＼笑つたのみで奥の棟へかくれたが、いつとはなく、頼朝の手許へ、頼朝が待ち望んでゐたものを届けてゐた。

八月六日の朝。

頼朝は、何思つたか、急にその藤原邦通と、住吉昌長のふたりを呼んで、

『わが生涯の門立ちを決する日は、いつが吉日か、謹んで卜ひを立てよ』

と、いひつけた。

二人は、はつと、大きな衝撃をうけた面持で、頭を下げた。——お答へは後刻にと、すぐ退がつた。

ふたりは、水垢離をとつて、易をたてた。そして頼朝の前へ出て告げた。

『この月、十七日こそ、何のお障りなき吉日と考へられます』

『十七日』

頼朝は、大きな眸をした。その眸から發したものに、二人は何といふ事なく驚いた。だが、氣のせるでさう見えたのかも知れない。

『十七日か。よからう』

と又、口のうちに、凡事のやうに頼朝は獨り答へてゐた。

その十三日となると、佐々木定綱、盛綱の兄弟は、頼朝の室を退がつてから間もなく、

『ちよつと、相模の父の家へ、用たしに行つてくる』

と、厩から馬を曳き出して遽に出て行つた。

『郷の家に用事ができた』

『叔父貴から手紙が来た』

『三島まで買ものに行く』

などと、それから續いて、この家人が次々に、配所から暇を告げては出て行つたので、配所は急に、無人になつた。

けれど、入れ代りに。

土肥二郎實平、工藤之介茂光、岡崎四郎義實、宇佐美三郎、天野遠景、加藤次景康などといふ人々や、日頃もよく見える面々が、一名づつ頼朝の室へ招かれて、

『異存あるや？』

と、十七日を旗擧げと決めてゐる——意中の底を打明けられた。

固より、將來の大計とか、當日の戦略とかいふ機密は、頼朝と時政のふたりだけが、胸にたたんでゐた事だつた。

『この期に、何の異存がありません。あなたが起ちあれば、今が今でも、日頃の誓ひを、陣頭で示すだけの用意はいつでもしてをります』

誰の答へにも、ためらひは見えなかつた。むしろ實行に迫つてから、各々の意地には、なほ強烈なものが加はつて来たかに感じられた。——よしつと、頼朝も心のうちで、この計畫の可能性が、多分に信じられて来た。

彼は、力づいた。

夜の眠りも、その溢れる力のうづきに、かへつて寝苦しかつた。

『こんなことでは困る』

と、自分をたしなめてみても、落着かないで仕方がなかつた。配所の二十年間に、實にめづらしく、こゝ數日だけ、讀經の聲もしなかつた。

十五日のたそがれから雨が降り出した。十六日も降りつゞけた。——かなりの雨量で、富士も箱根連山も見えない。白い霧旋風と雨のみが野を翔けまはつてゐた。

『あすは、愈、十七日』

無言のうちに、誰の面も硬ばつてゐた。その十六日の夕方、頼朝は、蓑笠に身をつんで、わづかな従者と共に、密かに配所を出、北條家のほうへ、移つてゐた。

待どほしい——然し又、恐ろしい氣もする一夜を、彼は、北條家の奥に眠つた。ふと、眼のあくたび、瀟々と、雨の音ばかり耳についた。そして夜はなかく明けてこなかつた。

二

チチ、チチと、小禽の聲がする。客殿の戸のすきまから仄白い光りがさす。夜明けた。頼朝

は、聲なく、叫びながら衾を蹴つて起きた。

『——治承四年八月十七日』

衣服をまとひながら彼は口のうちで云つた。

この日を、想念に刻んで、心のまん中へ、碑として建てた。

『佐殿には、はやお目ざめになりましたか』

誰やら早足に来て、戸の外からかう質す。頼朝が、それに對して、

『おうつ』

と答へると、又、ばら／＼と駈け去つてゆく。

館のうちには、すでに物々しい空気がみちてゐる。夜來の豪雨を冒して、馳せ参じてゐる若人輩の顔つきや姿が眼にうかぶ。さては又、こゝの北條家の家族や郎黨、一門の誰彼にとつても、けふこそは、成るか成らぬか、興亡のわかれ目に臨む朝であつた。

『お……霽れたな』

頼朝は、欄へ出ると、肺にいつばいの大氣を吸つた。まだうす暗いが、空は落着いて、美し

い晴空が、天の一角から澄みかけてゐた。

『館には、どこに居らるゝか』

廊を奥へと、歩いて行きながら、ふと見た老女に問ふと、

『はや、お山の大日堂へお渡りなされました』

と、云ふ。

道理で、母屋や客殿は、餘りに平常と變りがない。大玄關のはうもひそとしてゐる。頼朝は、時政の用意をうなづきながら、小侍に導かれて、庭つゞきの小高い山へ登つて行つた。

をとゝひからの雨に、木々の葉は地をかくしてゐた。所々に、生木の折れが目につく。こんな小山でも、方々に水が出て、無数の小さい瀧音が、館の濠へ落ちてゐた。

紫ばむだ晩闇の中に、大日堂の屋根が高くあつた。雲を破つた朝陽のまつ赤な光りが、その廂、その大柱——又、その縁からまはりに、ひしと簇つてゐる甲冑の人影に、燦と、刎ね返つてゐた。

『やあ。みんな!』

頼朝は、そこに立つと、粗野な大聲を出して、呼びかけた。

『早いことだな。わしは、ゆうべに限つて、深々と眠つてしまった。——今朝、起されるまで、何も知らないほどに』

と、云つて笑つた。

實際は、さうでなかつたが、さう云つたのである。それと、平常の謹嚴を解いて、今朝は非常に磊落な、何でもない集りのやうに、自身から粗野にくだけて見せた。

反對に、竝居る人々は、彼のすがたを仰ぐと、一齊に向き直つて、縁にゐる者は大地へ降り、佇んでゐる者は端へ寄つて、地へひざまづき、

『待ちに待つたる日が参りました。おさしづに從つて、かねてさし上げおいた誓紙の如く、各、傳家の一腰を横たへ、身命も擲つて、かくは勢揃ひいたしてござります。——わが君にも、疾々、お身じたくを』

と、揃つて禮をした。

頼朝は、武者たちが退き開いた間を通つて、堂の階をのぼり、大日堂の一隅で、鎧をまとい

た。

堂の上には、北條時政と、牧の方としかゐらなかつた。縁にゐる次男の義時が、母によばれて、母と共に、頼朝が具足をつけるのを、側から共に介添した。

『……………』

時政は、一方にあつて、さつきから默然と、外の頭数のみかぞへてゐた。彼の豫定してゐた人数よりも、思ひのほか集りが尠い——といふ顔いろに見えた。

三

わけて、今朝の勢揃ひには、必ず見えて居なければならぬ顔が見えない。時政は、それを密かに憂へてゐた。

佐々木太郎定綱を頭として、次郎經高、三郎盛綱、四郎高綱の四人の兄弟である。

いや、四人の数はともあれ、彼等の不參は、その父とか、養父とか、姉弟とか、従兄弟とかいふ、相模國の一方の勢力が、早くも、旗擧げに先立つて、離反を表示してゐるのではなから

うか？

さう時政は懸念されてならないのである。

澁谷庄司重國といひ、大庭景親といひ、どつちかといへば、源氏方より平家に縁の濃い者たちである。たゞ佐々木兄弟の父秀義だけが、近江源氏の血を今も頑固に誇つてゐる老人だが、これは平治の亂に、近江を追はれて相模へ移住して來て以來、ずっと澁谷庄司の世話になつてゐる關係から、その一族には、叛けない義理あひがある。

一族中の大庭景親などは、もつとも平家色の濃厚な人物である。もし、佐々木兄弟の行動から、今朝の勢ぞろひの事でも嗅ぎ知つたら、これは由々しい手ちがひになる。即刻、六波羅に早打が飛んでゐるものと考へておかなければならない。

『定綱、盛綱などは、見えてをらうか』

頼朝も、氣にかけてゐたとみえて、身支度を終ると、堂の縁近くへ坐して、人數の上を見渡しながらか、傍らの義時へたづねた。

『居らぬやうだ』

答へたのは、義時でなく、その父の時政であつた。

『…はてな』

頼朝も、急に、氣色をくもらせた。——時政の考へると同じやうに、彼も亦、兄弟の不參と聞いて、隣國の大きな一勢力の向背に心安からぬものを覺えたが、それ以上

(あれ程、多年、自分へ忠實に仕へてくれた家人が、今朝の眞際になつて？)

と、何かしら、もう、裏切られたやうに、主従のあひだの信念を挫がれた心地も加はつてゐた。

『さういへば、何うしたものであらう』

『見えぬのか。佐々木兄弟は』

『來てをらぬが…』

『はや時刻。朝討ちの機は束の間、やがて陽も高くならうに』
寄り集うた面々は、顧み合つて、口々につぶやいた。

頼朝は、心のうちで、

雨地・月天

(不覺……。つい彼等の志にうごかされ、大事を告げたのはわが一生の過りであつたか)と、悔いた。

時政は、やゝ焦躁をその眉にあらはして、

『いつたい何しに、佐々木の兄弟共は、相模まで歸つたのでござるか。……歸るのからして怪訝しいではないか。この大事をひかへた數日前などに』

と、苦りきつて訊ねた。

『されば、十二日の夜半、定綱、盛綱のふたりへ、旗擧げの事を打明けたところ、勇躍して、家より甲冑を取つて参ると申し——十三日の朝方、相模へ歸つたのであつたが』

頼朝が、悔いを洩らすのを聞くと、時政は、いよゝゝ氣の腐つた顔して、

『……では、参るまい。いづれ親共や一族に、問ひ糺されて、來るにも來られずにいるか、それとも、臆病風にふかれて變心したか、どつちかであらうて——』

暗に、頼朝の不覺を、詰るやうに云つた。

——が、然し、庭上にある百人足らずの若い若者輩は、そんな問題など、すこしも意として

みないらしく、

『いざ、立ちませう。あの通り、陽も昇りかけました』

と、意氣は軒昂であつた。

四

いつの間にか、頼朝と時政は、そこを立つて、大日像の壇のうしろへ隠れ、二人だけで、ひそひそ協議してゐた。

『何を猶豫なされてゐるのだ。かゝる間に、朝がけの時刻も逸してしまはうに』

堂の外では、氣負ひ立つてゐる人數が口々に云ひ合ひながら、兩將の號令一下を待ち焦れてゐるのである。

——が、容易に、時政も立たず、頼朝も出て來なかつた。

そのうちに、漸く、逸りきつた將士は、何か不安と疑ひを抱き出した。わけて、若い中にも若い佐奈田余一、南條小太郎、仁田四郎忠常などは、

『大事は、はや取止めか。この期になつて、北條殿にもわが君にも、何の御評議ぞや』
と、聞えよがしに、怒りさへおびて云ひ放つたのであつた。
むりもない。すでに陽は高くなりかけてゆく。夜討朝がけは敵の虚を衝いてこそ效はあるの
だ。これでは堂々たる白晝戦になつてしまふ。

『しづまれ』

やがて頼朝の聲がした。その姿を堂の縁に見せて、一同へ告げ渡した。

『佐々木兄弟その他、なほ遅着の者がだい多い。又、兵略上にも、最初の方針をすこし變
更の必要もあるので、今晚の朝がけは延期することに決めた。——次の命令の下るまで、一同
は、こゝを去らず、靜に休息いたしをるやうに』

云ひ終ると、頼朝も時政も、その儘、館のはうへ歩み去つてしまつた。

前の夜から眠りもせず、まだ風雨さへひどかつた暗いうちに、三里、四里も距てゐる諸々の
在所から馳せつけて来た面々は、さう聞くと、一時は面に色を作して、頼朝、時政のうしろ
姿を見送つてゐたが——次の一瞬には、氣拔けたやうに、

『まゝよ』

『睡くなつた』

『その間に、寝ろと御意か』

などと吹き合ひながら、堂を中心として、思ひ／＼に、自由な姿にくづれてしまつた。

頼朝も、時政も、いつたん館へもどつて、休息してゐたが、その日の午の頃まで、お互ひに
無言のうちに、

(まだか? …。佐々木の兄弟共は、まだ來居らぬか)

と、待ちかねてゐた。

午も過ぎる。

その佐々木の兄弟はおろか、不參の者も、一人として來なかつた。——馳せつけて來るほど
の者は、當然、時刻もたがへず、すでに來てゐた筈であつた。

『どう召さるな』

時政は、頼朝へ、最後の肚を質すやうに云ひ出した。

『あれへ集つただけの人数を以て、ともかく、決然とやりますかな。到着の人員は八十五騎といふ。……たんだ八十五騎ぢやが』

『元より最初から烏合の数は望まぬところ。一人だに、一念神佛に通じれば、世をも動かさう。鐵石の心をもつ、武士の八十餘騎もをれば、何事か貫けぬことやあらう』

『それと、朝がけを取止めたからには、當然、夜討となるが、こよひは三島明神の祭、明十八日は、觀世音の潔齋日で、あなたに取つて、殺生は好まれますまい。……とすると、十九日もなるが、さう延引しては、遂に事の洩れる心配もあるが』

——すると、そこへ、

『見えられました。佐々木定綱どの、經高どの以下、四名の御兄弟方、たゞ今、門前にお着きでございます』

と、館の侍一、二名が、あわたゞしく廊を馳けて来て、二人のゐる室へどなつた。

『なに。佐々木の兄弟共が、今馳せつけて見えたとか』

よほど欣しかつたに違ひない。頼朝は、聞くとすぐ、告げに來た侍たちと共に、

『どこにをるか。何處に——』

と、大股に廊を急いで駆け出してゐた。

門内の廣前に、疲れきつた二頭の瘦馬をいたはりながら、四人の兄弟は佇んでゐた。

兄の定綱も、次の經高も、三男の盛綱も、末の四郎高綱も、池から這ひ上つたやうに、武裝

した全身、雨と泥にまみれてゐた。

『オ、』

頼朝が、馳けよると、兄弟たちも等しく、

『おう……』

と、それへひざまづいた儘、暫くは、ことばもなかつた。

（——お前たちの爲に、大事な今朝の朝討の機を逸したではないか！ 何を愚圖々々してゐたのだ！）

兄弟が見えたら頭から叱るつもりであつたことばも、頼朝は、眼がしらに滲み出す熱いもの爲に、どこへやら喪失してゐた。

やがて、兄の定綱が、かう云ひ譚した。

『遅着の罪、いかやうとも、お叱り下さいませ。——今朝の東が白まぬうちにと、兄弟共、夜來の風雨の中を衝いて、必死と急ぎましたなれど、豪雨のため、途々、橋が流されてゐたり、崖くづれに阻まれたり——それに、いかんせん澁谷殿の一族にも、父にも語らはず、密かに参りました爲、良い馬も持ち合せず、二頭の馬に、四人が交々乗り代つては駆けたりなどして來ましたので、存外、道に手間どりました。……何とお詫のいたしやうもございませぬ』

頼朝は聞いてゐるうちに、滂沱と流れる涙をどうしやうもなかつた。主従の血はこんなにも濃いものだつたかと改めて知つた。一刻でも、この兄弟たちの心事を猜疑したのは、濟まない事であつたと思つた。

『よい、よい。……もう云ふな。合戦は夜となつた。やすめ、疲れたであらう』
彼も、眞情を吐いた。

主君の眞情にふれると、兄弟たちはもう疲れもわすれて、

(この君の爲には)

と、猶更、心をかため、

(夜となつたら、この遅着の罪を、働きの上に)

と、憤ひを心に誓つた。

静に、十七日の午さがりは過て行つた。伊豆の山々も、田も、町の人々も、やがて何事が今夜を待つてゐるか、知るものはない。たゞ暴風雨のあとの夏雲が、やがて眞つ赤に、西の空を焦して來たのみであつた。

や、殘光が淡れると、陽は落ちて、山ふところは紫の夕闇をこめて來た。ぼつり、ぼつりと物見の者が、北條家の内へ歸つて來た。たつぷり晝寝した八十何名かの武者輩は、蜩の聲がいつばいに聞える山の大日堂のまはりに、再び、今朝のやうに影を集めてゐた。

大きな宵月が、狩野川の上流からのぼつてゐた。木々が光る。時政も頼朝も、やがてそれへ登つて來た。夏なのに、ふしぎに皆、肌寒さが感じられた。毛穴をよだててゐるやうな顔いろ

は、月のせるばかりではなかつた。

『いざ、行かう』

時政は、先に立つた。

八十餘騎の黒い影はゆるぎ出した。——頼朝は、時政の意見に従つて、後に残ることになつた。——佐々木三郎盛綱、加藤次景廉、堀藤次親家の三人だけを側において。

彼は、堂の縁へ跳び上つて、驅けてゆく味方の勢を見送つてゐた。御所内の裏濠へ降りて、その吊橋を馳けわたり、宿場へつゞく並木道を反對に、山のはうへ向つてゆく一かたまりがやがて見える。遠くから望むと猶さら心細い小人數に思はれた。——この少數な人影が、一世を覆へす原動力になり得ようなどとは、考へられない事だつた。怖らく、頼朝自身でも、常識としては、さうあつたに違ひない。

六

時政は、自分が兵の先に立つて、館を立つ前に、

『あひにく今日は、三島明神の祭日故、大路を進めば、往來の者の目にふれて、逸はやく敵方へ知れよう。——姪ヶ島の間道を迂回して襲せては何うであらう』

と、案じて、頼朝や子息たちに計つたが、誰もみな、

『大事の一步から、裏道づたひはおもしろくない。大道を堂々行かう』

と、いふに一致したので、

『さらば』

と一氣に、まだ宵の街道を山之木郷へさして馳けたのであつた。

途中、肥田原まで来ると、時政は馬上から定綱をふり向いて、

『山木判官の後見、堤權守信遠は、山木家の北山に居を構へてをるが、その信遠は、勇猛な聞えのある男ではあるし、旁々、この小勢では、一方攻めしてゐるまに包まれる懼れもある。御邊の兄弟たちは、力を協せて、その信遠の住居へ向へ』

と、いひつけた。

定綱の兄弟たちは、

雨地・月天

『心得た』

と、わづかな別軍をひきゐて牛鉞から道を曲つた。

時政からつけてよこした源藤太といふ雑色男は、よく勝手を辨へてゐるといふので、堤信遠の邸の裏手へ兵をまはして、そこからふいに矢を射こんだ。

裏の方で、鬨の聲があがるのと同時に、佐々木兄弟は、表から躍りこんで、

『信遠やある！』

と、屋内へどなつた。

邸の内は、突然の事に、うろたへた人影が、屋鳴をさせて馳けあゝるいてゐた。その大屋根の上、八月十七日の月が晝のやうにあつた。

『あつ、そこにか』

兄弟たちの影を見て、六、七名の郎黨が、思ひ／＼な得物を持つて躍り出して來た。血とも思へない血しほが月の光りに黒々と、そこ此處へ無造作に撒きちらされた。

ひとりを組み伏せて、

『くッ』

と、上と下で、白刃を奪り合つてゐた次男經高が、深股へ矢をうけて、

『やられたッ』

と、さげんだ。

その隙に、猛然と、刎ね起きて經高へ迫りかけた敵を見ると定綱は、

『おのれ』

と、飛びついて、うしろから弟の敵を斬り伏した。

矢は滅茶苦茶にどこからともなく飛んで來るが、案外、相手に立つて來る敵は少い。中にひとり凄まじい働きをして、味方を惱ましてゐる男があつた。それこそ、主の信遠と見て、

『その首を』

と、經高が、傷手もわすれて、よろ遣ひながら近づいて行くと、信遠の方から、

『何奴ッ』

と、太刀をかぶつて、向つて來た。

經高は、危く見えた。死力をしぼつて、渡りあつてゐる間に、屋内を駆けまはつて、

「信遠はどこに」

と、血眼で當の相手をさがしてゐた定綱と、高綱のふたりが、

「やつ、あれだ」

——その頃。

本軍の時政以下の者は、山木家の山裾を流れてゐる天満橋を押渡つて、その中腹に見える土塀門へ近づくまでは、正面の石段道を避けて、左右の崖を、徐々と這ひのぼつてゐた。——木の間を洩れる月の斑と、風に降る雫のほか、まだ何の物音も揚つてゐなかつた。

燭はまた、いてゐるだけで仄暗い。さし込む月のはうが明るかつた。手枕で横になつてゐる人の足の爪にまで、その白い光りは映してゐた。

寝てゐる人の體から酒のほひが霧のやうに立つてゐる。ふたりの侍女は、黙然と、側に坐して蚊を追つてゐた。自墮落な主人のすがたを悲しむかのやうに、二つの白い顔は、冷たい眉をそろへて沈黙をまもつてゐた。

「——殿つ。殿つッ」

突然であつた。

登音も、こゝの部屋までは來ない間にである。

「狼藉者が」

「夜討つ、夜討つ」

あわたゞしく聞えて來た。

うつらうつら眠つてゐた山木兼隆が、愕と、首をもたげて、

「何つ？」

と、醉眼をみはつて見廻したとたんに、廂の上を、しゆるく／＼と、力のない外れ矢の這ふ音がした。

「——あつ」

跳び起て、うしろへ、

「長刀。長刀」

早口に呼んだが、侍女はもうるなかつた。逃げ轉びながら、兼隆の足もとで、きやッと悲鳴を立てたが、兼隆の耳は、もうその聲にもうつろであつた。

びゆつん——

どこかで旺な矢うなりがする。こゝへも姿を見せない郎黨たちが、はや射返してゐるのだなと知ると、兼隆は、一族の上であり又、六波羅の目代といふ職にある自分の重責を胸によび起してゐた。

同時に、

「ぬかつた」

と、悔いもし、その悔いに、總毛立つやうな怒りに燃えた。

「遂に、自暴自棄となつた流人めが、あぶれ者を語らつて襲せて来たか」

さう思つた。——その程度にしか、この咄嗟、この事態にぶつかつても、彼には判断されなかつたのである。

政子を奪はれた事件でも、兼隆が胸をなでて、あのまゝ紛争の表面化するのを避けてゐたのは、

(配所の流人づれと、六波羅の地方官たる自分とが、對等に、喧嘩するのも大人げない)

と、自分を高く持して、頼朝をあくまで卑しんでゐたからである。

六波羅の目代といふ官僚的な氣位は、庶民の想像以上、彼自身には、高い位置であつた。従つて、頼朝をめぐる郷土の青年たちの活動も、まったく知らないではなかつたが、

(多寡の知れたもの)

としてゐたし又、それ等の青年を目しては、頼朝同様に、

(生意氣さかりな不良の徒)

と、いふ程度で、法規の末節ばかりをやかましく云ひ、姑息な意地のわるい虐め方のみをして、肝腎な頼朝をめぐる若い仲間のうちにあつた大きな意慾が何であるかなどといふ點

は見のがしてゐたのである。
平家を仆す。

たとへそんな事を、こん夜の前に、彼の耳元で大きくどなる者があつても、彼は腹をかへて笑つたに違ひないのである。

『小癪なつ——』

と、長刀を押し取つて、表の口へ、駆け出して行くまでも、彼はまだ、そんな暴徒のなかまに、北條時政などといふよい年をした分別者が、加擔してゐるようなどは、思ひ泛んでも來なかつた。

ちやうどその夜は、三島明神の祭で、山木家の家人も、大半は参詣に出拂つてゐた。いつもその歸りには、黄瀬川の宿などで遊びに更かすのも常だつたから、館に居合せた郎黨はいくらの數でもなかつた。

攻め矢、防ぎ矢、双方から射る矢うなりの一瞬がやむと、ばら／＼と石などが投げこまれ、續いて門扉を打ち壊す音やら、土塀をこえて躍り入る兵の影やら、邸のうちは忽ち死闘の渦に巻きこまれた。

そこへ。

北山の方面から、堤信遠を討ちとめた佐々木定綱や經高の兄弟が、信遠の首を刃の先に刺しつらぬいて、

『討つた。討つた』

『信遠を討ち取つた』

と、口々にさげびながら、こゝへ加勢に馳けて來たので、寄手の指揮をしてゐた時政は、『北山は、はや陥ちたぞ。味方の幸先はいゞぞ。山木兼隆を討ちもらすな。塀まはりへ氣をくばられよ。』

と、聲を囁らしてゐた。

甲冑の兵に追ひつゝまれながら、死にもの狂ひに、逃げ、踏みとゞまり、又逃げ走つては、

又戦ひして、夜叉の姿になつてゐた山木判官は、時政のその聲音に、愕然、血ばしつた眼をさ
まよはせたが、

『おツつ？——その聲は』

と、時政のはうへ向つて、まじぐらに、大長刀をひつ提げて駈けて來た。
そして、刮と、大きな眼を、そこにゐた人影に向けて、

『噫つ。……時政かつ？』

猶も、信じられないやうに、呻いたが、最期と、観念したものか、

『欺かれたつ』

と、無念さうに、齒がみをしながら、長刀を振つて、いきなり時政の眞つかうへ跳びついて
來た。

頼朝は、山の大日堂の縁に、じつと立つたまゝ身動きもせず、そこから、山之木郷の空を見

てゐた。

北條家の館は、しいんとしてゐた。男といふ男はあらかた時政について、こよひの人数に加
はつて行つたので、女たちの局に、微かな灯影が、をのゝいて見えるだけだつた。

後に残つた者のはうが、戦に出て行つた人々よりも、遙に、大きな動悸を胸に抱いてゐた。

——一瞬々々、身を刻まれるやうに、

『軍は、勝か負か』

と、心配してゐた。

味方の負けた場合は？

當然、頼朝は、考へてゐた。——一死あるまで、と初めはさう覺悟してゐたが、こよひにな
つてから、

(いやさうでない。逃げきれぬまで逃げ退かう。若い生命だ。あだには)

と、思ひ直したりしてゐた。

その場合、館に残つてゐる時政の妻や娘などを、どうして救つて行かうか、そんな事まで案

じられたが、どうしても、

『勝軍であれ』

と、禱る氣もちが、いつばいであつた。二十年來の信仰と修養を心の柱に、凝と、靜な面を、保つてゐるが、ひとりでに、齒の根が緊つて來るのを何うしやうもなかつた。

『まだ、火の手は揚らぬか。……まだ、煙も見えぬか』

時折、彼が仰向いて、さう聲をかける空には、新平太といふ廐舎人が、大木の梢に坐つて、物見をしてゐた。

九

首尾よく、山木兼隆を討ち取つたら、直に目代屋敷から火の手をあげる――

火の手を見たら、味方の勝戦と思はれるやうにとは、時政が立つ前に、つがへて行つた約束なのである。

が、火の手は見えない。

宵の月も高くなつて、時刻はあれからたいぶ経つが、いつかう世間は靜ないつもの夏の夜に過ぎない。待ちもせぬ時鳥などが啼くだけだつた。

『はてな』

遂に、頼朝も身をゆるがし、堂の縁を降りると、焦躁に驅られたその足を、つかつかと彼方の大木の下まで運んで行つた。

梢の上を見上げて、又、

『新平太』

『はい』

『まだ火の手は見えぬか』

『見えません』

『よく見い、月光で分らぬのではないか』

『いゝえ、何の氣も』

頼朝は、大樹の下に、沈黙してゐた。新平太が上で身うごきするたび、梢の雫が彼の鎧の肩

ヘキラキラと落ちた。

『景廉、々々。ふたりも来い』

ふいに、後を向いて呼ぶ。

堂の傍にひかへてゐた加藤次景廉、佐々木盛綱、堀藤次親家——さう三名が、馳け寄つて来て、

『何ぞ、御用で』

と、ひざまづいて、頼朝の面を窺ふ。

頼朝は手に持つてゐた長刀を、景廉に投げながら語氣つよく云つた。

『まだ火の手の見えぬは、味方の苦戦とみえる。時移しては、大事は去る。こゝはよい、わしの身などに護りはいらぬ。そちたちも馳けつけて加勢せよ。——この長刀に、山木兼隆の血を塗つて来い』

『はつ』

三名は、頼朝のことばに、武者ぶるひを覚えながら突つ立つた。——さらぬだに、こよひの

初の戦に洩れて、疼々と腕をさすつてゐた折でもある。

——が、願て、

『でも、われわれ三名まで、こゝを離れては』

と、頼朝の身を氣づかふと、

『何を猶豫つ。はやく行けつ』

と、曾つて聞かないほどな咄高い聲で一喝され、三名は、あつと云ふなり道を馳け降りて、御所内の濠の吊橋を、飛ぶが如く、もう彼方へ急いでゐた。

けれど。

三名が、いかに足の限り馳けても、まだ山之木郷までは到底、行き着いてゐまいと思はれる頃に——青い月空の一方に、炎といふよりは、夜明けの美しさに似た曙色の光りがうつすら映し初めてゐた。

『あつ。火つ、火の手が』

梢の上から新平太が、われを忘れたやうに叫ぶと、

『—およう』

頼朝のひとみも、それを見てゐた。

『毆つ。火の手が…火の手が…あがりました』

狂喜の餘り梢の上の聲は泣いてゐるのだつた。——いつまでも、降りて来ようともしないのである。

頼朝も亦、石のやうに、凝と、飽かずに空の火の粉を仰いでゐた。けれど彼は、さつきからの焦躁と反對に、至つて無表情に返つてゐた。たゞ次第に烈々と火色を増してくる空に、その眸は、爛として、同じ光りを湛へてゐるだけだつた。

『…よしつ』

さういふと、彼は、暗い山笹の小徑をひろつて、黙々と、館のはうへ降りて行つた。あわてて木を迂り降りて来た新平太は、その影を後から追つて馳け出してゐた。

石橋山

一

自分では、かたく自分を、

(落着いてゐる。どこも、ふだんと異なる節はない)

と、信じてゐるが、きのふの事を今日願ても、思ひ出せない事のみが多いのである。

十七日の夜から、こゝ七日ばかりといふもの、頼朝はさうであつた。

頼朝が漸く、

(われまだ死なず)

と、自分の生命を、自分の中の静な泉に映して、覗き見るやうに、我といふ身心地を意識したのは、二十三日の夜から二十四日の明け方に互る眞つ暗な洞窟に凝と坐つてゐた間のことで

あつた。

その晩は、敵に襲はれる惧れもまつたくなかつた。

又味方から敵へかゝらうとする能動的な氣もちも、起さうとしても起らなかつた。

それほど、人間の存在は、力のない小さいものになつて、唯、伊豆山中をふき暴れる豪雨と、風の吹える聲と、聞ばかりが、天地であつた。

『——十四の時すら死ななかつた。それから二十年も死なずに來た。今、旗擧げをして、山木兼隆をその血まつりに討つてから七夜目、わしはまだ死んでゐない』

頼朝は、瞑目して思ふ。

『わしはよほど、運がよいとみえる。いや、神佛の加護に見まもられてゐる生命の持主とみえる。このぶんなら三十三歳の今年も、いや五十までも、七十八の先まで、生きとほして行けるかもしれない』

洞窟の口が、眞つ白なしぶきになると、瞬間、洞のなかは眞空になる。窒息してしまひさうな風壓を面に感じる。

『——生きてゐる』

こんな自然の暴威の中にも、寂として、生きてゐるかと思ふと、彼は、何ともいへない爽快を覺えた。——漸く、日頃の細かい神経や肉體のうちに住んでゐる臆病虫が、こよひの暴風雨に、颯然と、相模灘の彼方へふき飛んで行つてしまつた心地がする。

『わしの生命は強い。この大自然の中で山野に呼吸してゐる者だ。——平家の生命は、組み立てられた第宅や人智の機構を力とし、しかもそれは腐えかけてゐる末期のものだ。——暴風雨の中に立つ殿樓と、大自然の洞窟とのちがひだ。……勝てる！ きつと勝てる。平家のごとき何ものでもない』

彼の意志は、もうこの伊豆界隈の三千や五千の平家を、敵とも數へてゐなかつた。——幼な心に記憶してゐる都の様を腦裡に糸がいて、その文化、その舊い勢力、そこに想ひ起されるあらゆる宿怨を、敵とみつめた。

『殿……殿……』

誰か、洞窟の奥から呼ぶ。

一〇〇
が——瀧つぼの中なかににゐるやうな大雨たいうの音ねである、翔かける風かぜの聲こゑである。頼朝よりともの耳みみには、聞きえなかつた。

又また。

ふしぎにも、こよひは、頼朝よりともにとつて、山之木郷やまのきごうに火ひの手てをあげて以來いらいの心こころたのしい晩ばんであつた。瞑想めいさうの快樂けつらくも手傳てづかつて、風雨ふううのたけびさへ耳みみから忘わすれてゐたのである。

バチャ、バチャ……と水みづのなかを四つ這はひになつて、誰たれか、奥おくから這はひ寄よつて來た。佐々木高綱ささきたかねであつた。

『水みづが溜たまつて參まりました。お坐すわりになつてゐる楯たてが、舟ふねのやうに浸ひつてをります。もつと奥おくへお潜ひそみなされませ』

『高綱たかねか……』

『はい』

『まだ眠ねむらずにゐたのか』

『水みづに浸ひされて眠ねむがさめました』

『ほかの者もの共どもは』

『ずつと奥おくに、臥ふまろんで、前後ぜんごも知らずよく眠ねむつてゐるやうです』

『——ならば、こゝに居ゐよう。わしが參まつて、眠ねむざめるといけな。みな疲つかれたらう。わしはゆうべ快たく眠ねむつた。こん夜よはさう眠ねむたうない。こゝでよい。こゝでよい』

二

とかうする間に夜よが明あけた。

白しろみかけるとすぐ、

『おういつ』

と、谷間たにまで聲こゑがする。

『おう——い』

と、峰みねで答こたへあふ。

頼朝よりともは、洞窟どうくつを出た。

石橋山

暴風雨は、闇と共に去つて、一天雲もなく晴れてゐた。たゞ見る伊豆の海から房總の沖へかけて、まだ夜來の荒天を偲ばせる狂瀾のしぶきと海鳴のあるだけだつた。

『霽れたぞ』

『起ろ』

其處此處の岩間の蔭や木蔭から這ひ出して、身を伸ばした武者共が、口々に、さう呼び交すと、どこに昨夜を凌いでゐたかと疑はれるほど、見る／＼數百の兵と、數十頭の馬とが、頼朝の身邊にむらがつて來た。

『時政は、つゝがないか。工藤介茂光も老體。何のさほりもないか』

頼朝が、宥はると、

『何の、戦はまだこれから。お案じくいただきますな』

と、老年の茂光も、亦、その傍らにゐた北條時政も、願合つて、一笑した。

時政は、前へ進んで、

『令旨をお濡らしになりはしませぬか』

と、訊ねた。

頼朝は、顔を振つて、肌身にふかく護持してゐる以仁王の令旨を出して拜した。そして、時政の手に授け

『旗竿の先に結びつけて、軍勢のうへに高々と捧げよ』

と、いひつけた。

時政は、畏つて、中平四郎惟重を呼び、

『これは、亡き宮の御心のこもつてゐた令旨であり、又、われわれの魂でもある。心して持て』

と、捧持の役をいひつけた。

『身にあまる譽です。一命をかけて』

平四郎惟重は、ひざまづいて旗を押し載いた。その父、中頼隆は、わが子の光榮に涙ぐんで、

『せがれめに過ぎた大役、父子共々、力を協せて守護いたさう』

と、鎧の背に、大きな御幣を負ふて、勇み立つた。

『物見は歸らぬか』

頼朝の間に、

『物見の者も、あの暴風雨では、歩むにも歩めず、どこかへ山籠りいたしたものでせう。』
——が、今朝は、見えるに違ひない』

時政は、さう云つて、

『その間に、肚ごしらへをしておいては』
と、頼朝の眸を見た。

『ム、ム』

頼朝は、荒海のすさまじさを遠くながめてゐた。飛沫に旭光が映して、磯は金色に煙つてゐた。

『兵糧を解け』

『馬にも草を飼へ』

命令が傳はると、將士は、携へてゐる食糧を解いて、思ひ／＼に場所を取つて坐つた。焼米とか、味噌を塗つた麥餅の干板とかいふやうな物を除いては、暑さと雨のために、たい

がい腐敗してゐた。

でも、誰も黙つて喰つてゐる。頼朝は何とはなく、熱いものが眼に滲んで來てならなかつた。

——大事の成つたあかつきには、何を以て、今日の將士の勞に酬はうかと、心から思つた。

山木攻めの第一夜には、わづか八十餘騎の小勢に過ぎなかつたが、あれから伊豆を發して、三浦郷をこえ、相模の土肥へかゝるまでに、三浦次郎義澄の兄弟や、和田太郎義盛の一族などが、各々十騎、十五騎と、家の子郎黨をひきつれて参加したので、いつかこゝに見る味方の總勢は、三百餘を數へられた。しかも、その三百餘は、たゞの一人でも、せひなく従いて來たものではない。

その朝。

同じやうに、夜來の大風雨に、旗を伏せて、聲も形もなかつた平家方の軍勢は、日の出と共に、ぞろ／＼峰の上に姿をあらはして、

『あれに、敵が見える』

『叛軍が、山へ攀ちをる』

などと、小手をかざしたり、指さしたりしてゐた。

それが、源氏のはうからも、豆粒のやうに、點々と見えた。

吉濱村へ出る谷間道を隔て、平家方は、星山の峰つゞき一帯を陣地として、翩翻と、旗旗

をたてならべた。遠目にも白く燦めくのは、その間を歩く長刀や太刀などであらう。又、兜の

前立だとか鎧の金具なども、朝陽に映えて、どうかすると、星雲のやうに煙つた。

その陣地は、幾つにもわかれてゐて、東國に住む平家方として、名ある大將が、それ／＼一

族郎黨をひきつれ、こゝへ會して、

『叛亂の不平分子共、何ほどの事があらう』

と、ひかへてゐた。

まづ、相模の住人大庭三郎景親とか、河村三郎義秀、澁谷庄司重國、糟谷權守盛久などは、

その旗頭格といつてよい。

曾我太郎祐信。

瀧口三郎經俊。

長尾新五郎爲宗。同じく新六定景——といったやうな侍たちの中には、俣野五郎景久とか、

熊谷二郎直實などといふ豪の者も、羽搏く前の鷲のやうに、凝と佇んで、谷ひとつ彼方の敵を

見つめてゐた。

『大庭景親どのの兄、景義とかは、頼朝との誓ひ、とりわけ深く、こんども叛軍のうちををる

さうだが、骨肉同士が、かう谷を隔て、敵味方と對ひあふ心地はどんなであらうか。——思

ひやらるゝ事ではある』

夜明けの大氣を吸つたばかりで、まだどこか、戦氣は立つて來ない。侍たちのうちでは、こ

んな話が交されてゐた。

『いや、大庭どのばかりか、さういふ苦衷は、澁谷庄司重國どの邊りでも、同じ思ひを抱いて

をられよう。敵方にゐる佐々木兄弟四人の親、佐々木源三秀義と、重國どのとは、年來の親密、

今では、親戚のあひだから。しかも身は平家の重恩をうけてゐるので、雄々しくも、私情をす

て、老軀をこゝへ運んで来てをられる』

『それが、當りまへであるに、敵の北條時政のごときは、祖先も平家から出て、代々平家の御恩にあづかりながら、年がひもなく、血氣な若者の火いたづらに乗せられたか、それとも、彼が唆したか知らぬが、叛軍の指揮に當つてゐるさうだが、氣の知れない馬鹿者ではある』

『七日ばかり存分に暴れまはつたから、もう彼等の鬱憤もはれたらう。けふ明日のうちには、この邊の谷間を墓場として、時政も頼朝も、又それに蹴らせられた不運な輩も、みな土中の白骨と、急いで變つてゆくことだらう。——何しても、人騒がせな事をやり出したものよ』

平家方では、勝敗は問題としてゐなかつた。敵の三百餘騎に對して、味方の總勢は、三千騎をこえ、絶對の優位を占めてゐるからだつた。

又。

きのふ今日の山戦が、全日本の戦亂へとひろがつてゆく先驅の箭風であらうなどは、誰ひとり考へてもゐなかつた。すでに、宇治川で殲滅されてゐる源三位頼政の類が蜂起した事件よりも、はるかに小さい地方的の一騷擾と見なしてゐた。

だから、その首謀に、頼朝があつても、敵を呼ぶに、源氏方などはまだ稱ばなかつた。平家方たる自軍と對等に、彼を、源氏の軍として認めるのは、をかしいくらゐに考へてゐた。

たゞ、北條時政だけは、彼の門地や年配や日頃の人物からしても、その存在を認めないわけにはゆかなかつた。それだけに、若い不平分子の火いたづらの仲間などに、何で加盟したものが、解らない心理の持主として、平家方の陣地から眺めると、たゞ怪訝られるばかりだつた。

四

さうして、向ふ山と此つ方山との對陣は、朝から午の刻までつゞいた。

戦はぬうちから、勝算歴々なものとして、平家方の陣が、いやに落着きこんでゐた理由は午の刻を過ぎると、漸く分つた。

それは。

かねて頼朝とは宿怨のある伊豆の伊東祐親入道の到着を待つてゐたものらしく、伊東二郎祐親の軍勢およそ三百は、こゝへさして來ると、わざと、平家方の陣地たる星山へは登つて來ず

に、頼朝、時政たちの源氏の踏まへてゐる陣所からもう一つ先の山へ登つてしまつた。そして、源氏の陣所の山を、星山と自分等の占めた高地とで、ちやうど、挟み撃にする形態をとつた。

「伊東の入道が着いた」

「備へは成つた」

「いで、一揉みに」

と星山の頂きから、やゝ戦氣がうごき出した頃、はるか丸子河の下流のもう海邊に近い邊りの森から、むく／＼と黒煙りの揚るのが眺められた。

「やつ。あの火の手は？」

「大庭どのの館の邊りではないか」

「さうだ。大庭どののやしきが焼けてゐる」

立ち騒いでゐる所へ、物見の者の馳け上つて来て云ふには、三浦一族の者から大祖父と仰がれてゐる三浦大介義明が、八十餘歳といふ高齢の身をひつさげ、先には、子の義澄を頼朝方へ

出陣させてあるが、それでも猶、不安として、留守居の身寄や召使の端まで狩りあつめ、手勢百七、八十の兵を作つて、遽に、海ぞひ道を駆けつけて丸子河原に陣し、手はじめに大庭景親どのの館を焼き立て、其勢なかく、侮り難く見えまする——とのことであつた。

「え。あの老人が？」

と、平家方の將は、顔を見合せた事だつた。その煙よりも、八十餘歳といふ白髮の老武者が、それ程まで、頼朝の擧兵に、熱意をもつてゐる點が疑はれたのである。

どうして、そのやうな老齡な一族の長や、時政のやうな分別者が、「若いものゝ火惡戯」に過ぎないと思はれるこんな暴擧に、さまで熱情をもつばかりか、一族の運命を賭してまで組するのにか？

今、義明の襲來と聞いてもまだ分らないところに、平家方の軍勢三千餘騎の美々しさと、思な威容とがあつた。

もつとも中には、

(さもあらう)

と、密かに、むしろ會心の事と迄して、肯定してゐた人もある。

澁谷庄司や、熊谷直實などは、身を平家方に置いてはゐるが、火悪戯と人の視る若い者の精神が、決して暴でなく不逞でもなく、必然、この儘ではゐない時勢の先に立つて、よく天の啓示をつかんでゐる男兒たちであることを知つてゐた。

知つてゐながら、その時代精神をもつた信念の敵へ、弓をひかねばならないのも、複雑な世間の性質やら侍で立つ者のむづかしさだつた。

飯田五郎といふ郎黨がある。大庭景親の家來だつた。その男なども、

(飛んでゆきたい)

と思ふほど、實は、頼朝に日頃から志を寄せ、今も、向ふ山の源氏の陣地を見てゐたが、主人景親といふ者を持つてゐる身で、何うにもならなかつた。

なほ、三千の平家軍のうちには、さうした者は幾人かあつたらう。——なぜならば、平家は平家の既成勢力しか誇るものはなかつたが、頼朝のはうは、誰も頼朝や、一時政の力を持つてはしてゐない。

天の味方を力としてゐた。

天とは、もちろん時勢のことをいふ。大きな時の轉回を見とほして、その方向を誤たず、正しく地に立ち上つた姿勢の上に耀く天のことである。

——それはさうと。

谷間は早くも暮れかけた。何か、敵味方大聲が欲しあふと、一團又一團、太刀長刀をひつさげた兵が、われがちに薄暮の谷間をのぞんで駆け降りてゆく。

五

合戦は夕方から始まつた。

一日中、睨みあつてゐた兩軍が何のきつかけで、何つちから挑みかけて、接戦の口火が切られたか、分らなかつた。

それに、けふの對峙では、双方とも矢を大切に、一本のむだ矢も射交さなかつたのである。

谷を距てゝゐる空間が、矢の届かない距離だからであらう。——われこそ、などと晴々しく立つて、もし射た矢が、敵のゐる峰にも届かず、徒らに谷へ落ちて行つたりなどしたら、一代物笑ひの種となるから、誰も自重してゐたものとみえる。

それも、睨み合ひの原因になつてゐたが、もう一つの理由は、敵へ挑むには、何うしても谷を降らなければならぬ。降つてゆけば、忽ち、岩石の雨や矢うなりを頭へ浴びる。故に、先へ合戦をしかける方が不利といふ——分りきつた兵法の駆引にもよるものだつた。

で、薄暮に谷は紫ばんだ陽かげの底になりながらも、まだ根氣よく、兩軍、静寂のうちに睨みあつてゐた時、後で思へば、源氏の勢がかたまつて見える西側の崖が、暴風雨に土を洗はれて、岩石をむき出してゐたので、自然に、凄まじい土砂岩石の音を交せて、ざざざあつと、ひと雪崩れに、一角を谷へ削り落したのだつた。

『來たつ』

『襲せをつたぞつ』

だうつと、その後から、源氏方も馳け降りる、平家方も馳け降りる。——きつかけといへば

それが合戦のきつかけだつた。

『ちいッ』

『射止めたつ』

『矢をつ。矢を運べ』

平家方の半数近くはまだ山上に残つてゐた。手を空しく覗いてゐるのは一部の老将やその幕下に過ぎず、侍たちは弓を立て並べて、またゝく間に、背の羽壺のものは射盡してしまつた。

『味方を射るなつ。紛らはしいぞ。危い危い』

山の申腹で誰か注意する。谷あひの間は、だいぶ濃い。兩軍はもう肩と肩を接しての混戦となつてゐる。

『それつ、行けつ』

いちどに數百挺の弓が下へ置かれた。それだけの數の侍が、新手となつて又、ひとつ谷へ眞つ黒に降りた。

ゐる者がある。

矢に中つて、崖の途中から轉げ落ちてゆくのもある。

その矢の幾つかは、向ふ山の上に立つ頼朝が射た矢である。

頼朝が今朝から踏まへてゐるその山を、石橋山とこの邊の土民は稱んでゐる。

石橋山のうへには、一日中、弛んだ顔は一つもなかつた。これこそ天上といふのだらう、何の雜念もなく、今は、迷ひもなく、三百餘人が一體になつて、たゞ竿頭の白旗と、それに結へつけてある以仁王の令旨とを、時折、無言で見あげ合つてゐた。

その一體の人数も、今はあらかた谷底で戦つてゐる。頼朝のそばには、加藤次景廉、大見平太、佐々木高綱、堀藤次などのわづか五、六名の影が見えるに過ぎなかつた。

「高綱、高綱」

頼朝は、弓を投げすてるとすぐ、堀藤次の手から、長刀をうけ取つて、

「面倒。従いて來い」

「あつ、しばし」

高綱や景廉も、弓をおくと、慌て、頼朝を遮つた。

「亂軍です。暗さも暗し」

「眺めてをる場合か」

「でも、大事のお身に」

「十四の年も死ななかつた。二十年來死ななかつた。死なば天命、こゝに居ても死なう。——聞け、あの銜を。味方の一兵は敵の十人にも當つてゐるのだ。——行かうつ。南無八幡大菩薩、頼朝に事を成し遂げさせ給ふか、又、こゝに生命を召し給ふか。今、この谷間へ抛つ身を以て、いづれとも、天意をお示しあれ」

若い肉體は、獅子吼してさう云ふとすぐ、鴨のごとく、眞つ逆さまに馳けてゐた。

碧血

そこでの戦ひは、一瞬で終つてゐた。源氏方の敗北らしい。

合戦の中に立ち交じると、勝敗は分らなくなる。わけて谷あひの暗闇である。

駆ける者に採まれながら、頼朝も馳けてゐた。

『相山へ、相山へつ』

聲で、味方と知り、戦は、敗けだなど覺る。

さうかと思ふと、鎧と鎧をぶつけ合つて、お互の顔を間近に見るなり、

『こいつッ』

いきなり直ぐ側の者を斬つたり、斬られたりする程、敵もこの中に入り交つてゐるらしい。

さういふ中で、佐奈田余一義忠とか、武藤一郎とか、頼朝に取つても、世の中にとつても、

惜しい若者が幾人とも討死して行つた。

石ころと雑草ばかりな河原へ出た。西と南に谷口への道がある。味方の大部分は、そのどつ

方へ行つたか。

頼朝は、幾度か轉び、轉ぶたびに、

『討死か』

と、冷やかに思ふ。

なぜか、ふしぎにも、生きようとする執念が稀薄である。はつと、それを危険と氣づいた時、

極度な肉體の疲勞が思ひ出された。もう一步も耐へられないほど喘いでゐる疲勞が、やゝもす

ると、死の安逸をさゝやくのである。

『なんの！』

今は、後に迫る敵以上の敵が、頼朝自身の中にあつた。齒がみをして、起つ、よろ這ふ。又

轉ぶ。

兜も捨てた。具足を解かうとした。——その時である。

『しやあッ』

と、嗚れ聲が、後でした。

振向くと、馬に乗つた敵方の一將である。頼朝を見て、駒をとばして來たのだ。そして、大

きな口を刮ツと開き、太刀をふり被つて、何か云つたのだが、彼もさつきからの戦闘に、士卒



を蹴まして喉をつぶし、その聲は、ことばの意味をなさず、——しやアツと、異様な音聲を發したのであつた。

『あつ。——景親』

頼朝の長刀は、無意識に縦横の閃光を描いた。その一線は、敵の馬の鼻づらをかすめたので、馬は愕いて刎ねた。——が、刎ね落されるやうな敵ではなく、かへつて跳躍を迅めて、ふた、び頼朝のまつ向へ、鞍上からすさまじい力をこめた太刀が落ちかけた。

すると、その平家方の武將の郎黨らしい男が、いきなり馳け寄つて主人の駒の前脚を刀で撲りつけた。もちろん馬は勢よく前へのめり込み、鞍上の武將は、石ころの上へもんどり打つた。

『得たりつ』

と、頼朝が、その上へ、一撃加へようとすると、彼の郎黨は、

『佐殿つ。助けて下さいつ。——それも私の主人ですつ』

と叫びながら、頼朝の體を突き飛ばし——そしてすぐ頼朝を扶け起して、遮二無二、相山谷

の方へ向つて逃げ出した。

『誰だつ？』

『後で。後でいひます』

『敵か』

『敵ではありません』

『味方か』

『お味でもありません』

『では。……何者だ』

『迷つてゐる人間です。——たつた今までは、大庭三郎景親様の家人でした』

『あつ、飯田五郎か』

『さうです』

『五郎か』

『……さうです』

足を止めて、頼朝は、自分の體を扶けてゐる男の顔を見た。たつた一度、大庭景親の兄景義に伴はれて、配所へ来たことがある。又志を共にする若人の會合でも顔を一、二度見たことがある。あれは臭い、怪しい男だと、人々が注意したので、景義もそれきり伴れて來なくなつた男であつた。

二

『前々から、心ではお慕ひ申してをりましたが、主人や妻子を捨てゝまで、御旗の下へ奔る氣にもなれず、けふの戦ひにも、平家方の陣にをりましたが、深く考へてみると、折角のお旗擧が、こゝで挫折したら、腐つたまゝの世の中が、まだ十年も二十年も續いてゆきませう。それだけ國土の損です。民の苦しみます。人心を悪くさせるばかりです。——となつたら、勿體ない事ですが、朝廷の御存亡まで案じられます』

飯田五郎は、一生懸命で話すのだつた。どう云つたら、自分の眞心が、頼朝に容れられるかと、覺束ない智識をしぼつて語る容子があはれでもあつた。

『……で。いろ／＼と、迷つたり惱んだり致しましたが、大義と小義だと、考へ着きましたので、源氏方のはうへ、走りこむ隙を窺つてをりましたところ、御危難を見かけたので、われにも非ず、前の主人景親様を、あのやうな目に遭はせて、お供に従いて來たわけでございます。』

——以後、お馬の口取にでも、お召使ひ下さるなら有難うぞんじまする』

こゝまで云ふと、飯田五郎は泣き聲になつてしまつた。

『この頼朝の敗れを見ながら、敗軍の將に従いて來たそちこそ、頼朝にとつて、眞の味方。うれしいぞ』

と、頼朝も涙ぐんで、行末長く主従たることを誓つた。

けれど、源氏系でも平家系でも、縁故などはどうでもよい一士卒に過ぎない飯田五郎が、敵方に身を投じて來たのは、頼朝といふ人間のみに景仰を持つたわけではない。彼が隨喜したものは、彼が産も家系もない庶民の一人だけに、かへつて正直に理解される現状の世の中の悪さと、將來に渴望されるものにあつた。——人よりも、その革新精神の旗じるしにあつた。

『あつ。かうしてゐると、又さつきのやうな重圍に陥ちさうです。矢が集つて來ました。もう

少し、お休へ下さい』

五郎はふたゝび頼朝を扶け勵ましながら、相山谷ふかく逃げこんだ。

明くれば、二十四日。

追々と、彼の所在を知つて、味方が集つて來たので、頼朝は、後の峰へ上つて、陣を立て直さうと云ふ。

元より否やはない。

『けふこそ、きのふの雪辱を』

と、面々の意氣は、すこしも挫けてゐないのみか、むしろ旺だつた。お互ひが、暗黙のうちに、かう顔を見合ふのも、今の一瞬が最期か、けふ半日の間かと、散るのをいともさり氣なく戦いでゐる櫻の花のやうに、あつさり心のうちで訣別を告げてゐた。そこに、悲壯といふやうな血臭いものもない程、潔よかつた。

『登れ』

『登れつ』

天上へでもさして行くやうに、人は蜂の肌につかまつて攀ぢ出した。

すると、敵の大庭景親以下、三千餘騎が喊の聲をあげて迫つて來た。

まだ、布陣の整はないうちであつた爲、又しても、源氏の勢は、個々に力を分散して戦ふほかなかつた。

それでも、加藤次景廉や大見平次等は、

『こゝは、われ等で殿軍をいたせば、方々は、もつと奥地へ遠く引揚げて、よい足場を占めて備へ立てなされ』

と、味方へさげびながら、もう敢然と、敵の白刃を迎へてゐた。

退くのが賢明——と思ひながら、やはり、さういふ味方ほど捨てきれないで、誰しも後髪をひかれるとみえ、頼朝を初めとし、時政父子までが、山の中段に踏みとゞまり、矢數のあるかぎり射つゞけてゐた。

景廉の父、加藤五景員は、子を氣づかつて、最後まで踏み止まる。

大見平次の兄政光も、弟に心をひかれ、殿軍の勢に交じつて、亂軍の中へ駆け入つた。

そのほか、加藤太光員、佐々木高綱、堀藤次、同じく四郎、天野遠景、同じく平内など、わ

き目もふらず敵へ當つてゆく。

『うぬつ』

『お、うつ』

『くわッ』

と、いふやうな喚きと喚きが、甲冑の響きや劍の音に入り交じつて、この世のものとも思はれない凄愴な聲を呼んだ。そして焦けつくやうな谷間河原は、見るまに、そこらの石も夏草も血でない所はなくなつた。

矢だねも盡ると、みな太刀長刀の接戦になつた。平家方は、大庭景親をはじめ、重なる者は騎馬だつたが、石ころの多い谷あひでは、名馬の逸足も、かへつて敏捷な敵にその脚元を薙ぎられたり、蹄を踏かせないため活躍の自由を缺いたりするので、

『馬上は不利』

と、云ひ合せたやうに駒を捨てて戦つた。

源氏方一人に、平家方は十人以上を以て當り得る優位にあつたが、その優位がものいふ迄には、かなりな時を費した。死者や負傷の數も敵の十倍以上を出し、このまゝで斬り立てられると、遂には自身が危いぞ——と切羽つまつて來てから初めて、

『くそつ、多寡の知れた敵に。ふがひないぞ、味方の者。死ねや、退くなつ』

と、俄然、平家方も、咆哮を揚げ直して、死にもの狂ひになつて來た。

組む。組んだまゝ、水へ轉げ落ちる。

首を掻いて、

『討つたッ。——敵の』

と、躍りあがつて、血のしたゝる物を差しあげながら、何か功名をさげんでゐると、

『こいつッ』

と、その後から、躍りかゝつて來た太刀の下に、首を持つたまゝ、首を掻かれかけてゐる武

者もある。

『あつ、殿ッ。——滅相もないつ。あなた様は』

亂軍の中で、名もない敵と、斬りむすんでゐる頼朝を見つけて、天野遠景は、腹が立つた。

腹立ちまぎれに、

『木つ葉共め』

と、頼朝へ挑んでゐる敵の、四、五人を、遠景は大長刀で滅茶苦茶に叩き伏せ、薙ぎとばして、

『おッ、お逃げにならないければいけませんッ』

と、恐い顔のまゝ叱咤した。

敵の武者が乗りすてた駒が、鞍のまゝ、放牧されてあるやうに、彼方此方に馳けまはつてゐた。合戦をよそに、水をのんでゐる馬、草を喰つてゐる馬、すこし氣が狂れたやうに嘶いてばかりゐる馬——など澤山見えた。

『殿ッ。これへ』

一頭の鹿毛をつかまへて、遠景が頼朝にすゝめてゐると、一かたまり雪崩れ合つて來た味方が、

『や。殿には、まだこゝに』

と、その無事を、奇蹟のやうに驚きながら、駒の前後を被ひくるんで、無二無三、山の深くへ索きこんで行つた。

景親たち平家勢は、

『逃がすな』

『あれこそ頼朝』

と、後から氣づいて、眞つ黒に追つて來たが、高綱、景廉などの烈しい防ぎ矢に、ばたくと死者を出したので先鋒はみな身を伏せ、矢風が熄んだと見ると、猛然立つて、追ひかけた。

四

『時政は。——時政父子は、後から見えぬか』

碧 血

逃げのびて行く道々も、頼朝は幾たびとなく、左右の者に云つた。

「馳けもどつて、殿軍されてゐるまに、お慕ひ迷れたとみえまする」

と、供の人々は答へた。

その中に、土肥二郎實平がゐる。實平の健在を見ると、頼朝は、

「居たか」

と、やゝ力づよい顔をした。

楢山の深くまで辿りつくと實平は、戦の歸結に見きりをつけて、かう提議した。

「さて。この大勢では、どこへ隠れ忍ぶにも、すぐ敵の目に見出される惧れがある。これまで、お側を離れずに、尾き従うて参られた各々の御忠節は、涙ぐましく存するが、これでお別れしたはうが、かへつて殿の御爲であるまいか」

「……」

誰も、答へる者はなかつた。誰の面も、慘として、上らなかつた。敗戦の無念を唇に嚙んで、凝と、熱涙をこらへてゐた。

ともすれば、嗚咽と變りさうな慄き聲を、實平は強ひて、囁ましながら、言葉をつゞけた。

「今のお別れが、誓つて、後日の俸せとなるやうに、こゝは、一先づ袂を別たうではないか。

——殿お一人の身ならば、この實平が、たとひ一月ふた月の間は、どのやうに致しても、きつとお匿ひ申してみせる。——やがて、計を立て直して、會稽の恥をそゞぐ日まで」

誰か、手放して泣く者があつた。一瞬、みな肱を横にして顔へ當てた。

頼朝は泣きたいよりは、自分の不徳を詫びたかつた。この惨敗の責任がみな自分にあるものと責められてゐた。

だが、かうなつても、

(これ限りではない！)

といふ希望は、誰よりも頼朝の信念にあつた。今が初めての荊棘の道ではない。これが最後かと思ふ一步前が、實は、次への悠久な道へ出る曙光の堺であつたことを、幼年の頃から幾度も身に訓へられてゐたからである。

「せひ、最後まで、御供を」

と、それは、こゝにゐる者の總ての希ひだつたが、頼朝も、他日を期して別れてくれと云ひ渡したので、人々は、やがて散々に、思ひ／＼に、落ちて行くしかなかつた。

頼朝、實平だけを殘して、あらまは皆、落ちのびて行つた頃、亂軍の中で見失つた飯田五郎が、息喘いて、追ひついて來た。

「珠數を拾ひました。このお珠數は、殿ではございませぬか」

見れば、自分の落した物なので、頼朝は、非常に欣んだ。その飯田五郎も、泣いて供を頼つたが、

「けふが最後ではない。ふた、び旗を見たら來い」

と、頼朝は諭して、無理に追ひやつた。なぜか、その五郎を追ひやるのが、誰よりも辛い心地がした。

一方、頼朝に迷れた時政父子は、道を違へて、箱根路から湯坂を越え、甲斐のはうへ落ちよと志したが、三男三郎は、土肥山から早川へ來る途中、伊東祐親入道の兵に圍まれて討死し、同行の工藤介茂光は、老人なので、精がきれたか、

「もうだめだ。これ迄」

と、絶叫すると、腹を切つて、最期をいそいでしまつた。

峰の背を、實平と共に、逃げのびてゆく頼朝の眼には、遠く、其處彼處で、かうした末路を告げてゆく味方の分散が見えたであらう。

「あの峰だ」

「いや、溪間へ馳けた」

執念ぶかく追ひかけて來た敵の大庭景親の兵は、頼朝が、どう侮まさうとしても、にほひを嗅ぎ知つて、狙け纏つて來た。

「おウ——いッ。味方の衆、この山にはゐない。それがしの手勢で探し盡した。向ふ山だ。彼方の谷や峰ふところが怪しいぞ」

平家方の一將、梶原平三景時は、どういふ思惑があつてだらうか、頼朝の潜んだ木暗がりを見届けながら、岩上に立つて味方のはうへ大聲あげながら手を振つてゐた。

船出

『こよひも、……赤い？』

政子は、夜空を見つめてゐた。——ここから幾里もない右橋山、相山の方の空を。雲に映る戦火よりも、彼女の眸に燃えるものゝ方が、むしろ炎に似てゐた。

『どうなされて……』

と、父を思ふ。兄を思ふ。——頼朝の身をひしと氣遣ふ。

先頃の暴風雨の晩には、一夜中、この尼院の佛前に坐つたまゝで、戦勝を禱つてゐた。

あらゆる人手を頼んで軍の様子を見せにやつてゐる。

右橋山の味方の惨敗は、もうつぶさに聞いてゐた。

『——お生命さへあれば』

と、今はたゞ、そのみが一縷の望みであつた。

そして、心の底に、

『うかとは、死ぬまい』

と、固く自分を戒めてゐた。

良人の頼朝が果てたら、父も死ぬであらう、兄も斬死にするであらう。——當然、彼女も、

心の支度は、疾く決めてゐる。

それだけに、軽はずみを戒めてゐた。良人の思慮ふかい性格をよく知つてゐるだけに、良人も最後の最後まで、生きつゞけるであらう事を——固く信じてゐた。

『政子様よ。夜露はからだに毒。もう屋の内へおはいりなされ。こよひは、お寝みなされたが

よしい』

走り湯の法音比丘尼は、時折、縁に出て来て、聲をかけた。

『は……。……は』

庭垣の隅の方から、政子の返辭は素直に聞えてくる。けれど、室内へ戻つて来る様子はなかつた。

「……御無理もない」

と、法音尼は、草むらの中に佇んで、凝と、天の一方を見てゐる政子のすがたへ、遠くから掌を合せた。

その人の影へ、掌を合せて念じるしか——老尼には政子を慰めることばもないのである。更けて行つた。

伊豆の海は、戦のせるか、漁火の影もない。先頃の暴風も、嘘のやうに風ぎてゐる。

「政子さま。それにお居でなされましたか」

「誰ぢや」

「牧場の於萱でございます」

「萱か。……待つてゐました。何ぞ變つた事でも聞きましたか」

「はい。漸くのこと、御先途がわかりました」

庭口から忍んで来た牧場の妻の於萱は、それへ来て、夜露の中にひざまづいた。

彼女も、政子のために、生命がけて戦の後の情報を聞き蒐めに行つてゐた一人であつた。

「——頼朝様には、二十四日の戦に、お味方と、ちり／＼にお別れ遊ばした後、實平殿お一人が御供して、相山から箱根へお越えなされ、そこで都合よく、勇君の北條時政様とめぐり會ひ、ひと先箱根権現の別當永實様のところへお身を隠し遊ばしました。……もう御一命は、大丈夫でございます。永實坊も行實坊も、あの御兄弟とも、前々から源家に深く心を寄せてゐる衆でも御座いますから」

政子は、聞いてゐるうちから、涙があふれて——天佑に感謝する氣もちと歡びにいつばいになつて——於萱の勞を憐れつてやることばすら出なかつた。

では、良人もこよひは、戦ひ疲れた身を、久しぶりに、屋根の下に横たへてゐるだらう。——さう思ふと、彼女も遽にそこへ坐つてしまひたくなつた。

「奥方。佐殿の奥方。走り湯権現の覺明でございます。それへはいりかねますので、垣近くまでお顔をおかし下さい。——戦場の模様、その後の人々の御消息、いろいろ、探り聞いて参りまし

「た」
折ふし、垣の外から又、さう小聲で告げる者があつた。

二

ゆうべは、牧場の妻や、走り湯桶現の覺明からの報告。——又けふも、政子の許へは、種々な人たちが出入りして、戦後の模様を、何くれとなく知らせて来た。

それらの歸結は、各々、人と場所とを異にするが、今假に、情報を綜合して並べてみると、およそ次のやうな幾つかの断片的な話となる。

有力な源氏の味方と期待されてゐた三浦義澄の一族は、かんじんな石橋山の戦ひに間に合はず、丸子河から由井ヶ濱方面へ出たところ、平家方の畠山重忠の軍と行き遭ひ、重忠方は郎黨五十餘人の首を失つて退却し、三浦一族も、多くの負傷や死者を出して退きわかれ、三浦郷へ歸つて、衣笠城の孤壘を固めてゐるが、そこへも又、畠山重忠を初め、河越太郎重頼、江戸太

郎重長などの平家勢が、ふたゝび大舉して、包圍に向つてゐるといふから、到底、長くは支へきれさうにも思はれない。

最初から目のかたきに頼朝を狙ふてゐた大庭景親は、二十五日の夕方、一齊に、布令を發し、(頼朝を匿ふ者、木戸の警備を怠つた者、等しく斷罪に處するであらう)と辻々に高札を立て、およそ諸國へ通じ宿驛は元より、山傳ひの小道から、濱邊の一帶に互るまで眼を光らせて、詮議はいよく峻烈を極めてゐるとある。

戦は、富士山麓から、甲州方面にまで波及したやうである。甲斐の武田、一條などといふ土豪も、頼朝と呼應して動きかけた形勢が見えたといふので、機先を制すべく、駿河の目代橋遠茂だの、俣野景久などの平家が、二十四日、追討に向つたが、途中、富士山麓で野營した晩にどうした事か、彼らの所持してゐた弓が百何十張も、野鼠のため喰ひ切られてしまつた。

折も折。

船出

石橋山へ馳けつけると、この地方を通つた源氏方の安田義定、工藤景光、同じく小次郎など
の手勢とばつたり遭遇したので、

(それつ)

と、忽ち戦になつたが、一方は飛び道具がみな役に立たないので散々に射立てられ、逃げる
を又追ひ捲られて、野鼠のおかげで全軍の三分の一しか生きて還らなかつたといふ噂なども、
——半、面白げに、宿驛の凡下たちに沙汰されてゐる。

一時、箱根の別當の許にかくれた頼朝主従は、急に又、そこを去つて、土肥方面へ落ちて行
つたらしい。

原因は、頼朝に組してゐる別當の弟の良選といふのが、前々から山木判官兼隆の祈禱の師
で、ひそかに、平家へ通じた氣はいが見えたからである。

三浦一族の衣笠城には、一族の大祖父と仰ぐ八十九歳の大介義明も立て籠つてゐたが、砦の

運命も、早これまでと迫つた日、子や孫を集めていふには、
(古巣の城は焼け落ちてしまへ。かへつてお前たちの爲だ。廣い世の中へ、各々、力いつばい
の巢立ちをせよ。——この義明は、累代源氏の御家人と生れ、八十餘歳まで生きのびた效ひあ
つて、今、佐殿の旗擧げを見た欣しさ。……これで死んでもいい。落城の火の粉は、孫や子た
ちの出世の種蒔ぢや。こんなよい往生があるものか)
そして、去りがての孫や子たちが、落ちてゆくの見届けてから、八十九歳の老将は、華々
しく戦死した。

佐々木定綱、盛綱、高綱の兄弟三人は、主とわかれて、ひそかに、澁谷庄司重國の館を訪ね
てゆくと、重國は、兄弟を庫の中に匿ひ、食事をすゝめて、
(なぜこゝに、二郎經高は見えぬのか。戦死したか)
との質問に、

(いえ、無事ではりますが、仔細あつて、お館には足踏みできぬと、一人どこかへ立ち去りま

した)

兄弟が答へると、重國は眼をしばだたいて、

(さてこそ、いつぞや頼朝の加勢に行くとして、暇乞ひに見えた折、わしが諫めたが、聞き入れずに馳けつけた。それを恥かしう思ふて参らぬものとみえる)

と、すぐ郎黨を四方へやつて、二郎經高を尋ねさせた。——かくの如く、平家とよばれ、源氏と稱へて、戦場では立ち分れても、血はひとつの國民だつた。涙はお互ひに持つてゐた。

三

彼女はもう庭にも立たなかつた。二十六、七日の兩日は、殆ど机の前と、御佛の前に凝と坐つてゐた。

その二十七日の宵である。

『お傷はしや。……さこそ、この幾日の間は』

と、咽びながら、彼女の前にひれ伏した老武士があつた。

『お、あなたは』

彼女は、眼をすえた。それは加藤次景廉の父、景員であつた。

『せがれ共は、甲斐へ落ちのびましたが、年老が連れでは、足手纏ひにならうと思ひ、別れて、この走り湯権現の房へ、けふの明方隠れこみました』

見れば、さういふ景員は、もう髪を剃ろして、法體になつてゐる。

この老人は、實戦に参加した一人である。さだめし、けふ迄の消息以上、詳しい事を知つてゐよう。

彼女は何より先に訊ねた。

『父は? ……どうして居りませうか』

『時政殿には、首尾よう舟を手に入れられて、海路を安房へと、お渡りになりました』

『安房へ』

彼女は、少しも欣しい顔でなかつた。——頼朝と一緒にとは、景員が云はなかつたからである。

顔いろを察して、老人はすぐ口早に、後のことばを續けた。

「又、佐殿におかせられましては、明二十八日の未明を期し、一舟後から同じ安房の平北の磯をさして、御渡海あるはずでござりまする。……が、これは極秘、ゆめ、人にお氣どられ遊ばしますなよ」

「……さうか」

初めて彼女の面に、ほつとした容子が漂つた。悲痛な別離を知るうちにも、花洩る微かな曙光のやうな色も見えた。

景員がそこを辭して、僧房へもどると間もなく、彼女も寢所へかくれた。けれど彼女は衾には入らなかつた。身拵へもかひなく、密に尼院を出て、眞つ暗な伊豆山の上へと、たゞ一人で歩いてゐた。

高原の牧へ出た。

その小屋をほとくと叩き、牧場の妻の於萱を道案内にして、又幾里かを歩きつづけた。
『萱。……こゝは何處』



「湯河原の北山でございませぬ。この下が、吉濱、鍛冶屋郷」

「では、もう少しし」

と、又歩いた。

「政子様。もう行けませぬ。……この先は断り立てたやうな崖ですから」

「その磯は」

「真鶴です。土肥郷の真鶴でございませぬ」

「……」

政子は、黙つてうなづきながら、露や草の實に汚れた身を、その儘、仆れてゐる朽木へ腰かけて、もう明け近い海面に向けてゐた。

磯を打つ波音のほか何の物音も聞えなかつた。安房、上總の彼方も、雲か霧か海か、けじめもなかつた。

——が、いつとはなく、それが水と空と、雲とにわかれて見えて來た。渺として、たゞ霧のみであつた海面にも、チカツと、黄色の光りが加ねた。

「貴……」

政子は立つて、遽に、眼をいつばいに働かせた。

「見えぬか。……見えぬか。……殿のお舟が。今朝のお舟立ちが」

「見えませぬ。何も」

「……あれは……」

「磯邊の巖です」

遠い一連の山影は、上總、安房の半島である。そのあたりから大いなる太陽の端が眞つ赤に昇りかけた。

刻、刻、見てゐるうちに、陽は半島の上に離れた。海はいちめん燦々と揺れた。その輝く海波の沖に——あゝすでに沖の方だつたが、政子の眸に、一點、黒く見えたものがあつた。

政子は、その日から、秋戸郷へ身を潜めて、もう尼院へは歸らなかつた。

一羽の雁

九月の空も、海の碧も、澄みきつた秋の晝だつた。

下總の寒川べりを、うろついてゐる旅の商人風の男がある。橋の口を、幾度か行つたり來たりしてゐた。

七月頃から、橋口には、交代で見張りの武士が立ち始めてゐる。——伊豆半島とこの地方とは、海を隔てゐるとはいへ、晴れた日には、鮮らかに見えもする對岸にある。

當然、伊豆に揚つた波濤は、こゝの岸へも搏つて來た。

下總、上總、安房、それ／＼、派別を明らかにし始めた。いや、自身はその何れにも偏せず、自重してゐるつもりでも、もう環境がゆるさないのである。

(某は、源氏くさい)

(誰と誰は、どうなつても、平家方をうごくまい)

さう人々が色別けを押つけて觀るし、又、頼朝の旗擧げなるものが、こゝではその實力以上に思はれてゐたので「源氏方」といふ言葉が、こゝでは平家方と對立して、通り言葉に使はれてゐた。

頼朝の人間の評價も、地元の伊豆よりは、この地方のほうが、より高く買はれてゐた。彼が伊東祐親入道のむすめと戀をしたり、配所へ龜之前をひき入れたり、北條家の政子とも同様に浮名をながしたり——そんな半面的な些事がいち／＼傳つてゐないだけでも、地元の人々よりは、遙に、尊敬を持たれてゐた。

そして、六月末の擧兵が聞えてくると、

(遂に、起つたな……)

と、誰もそれに一應の同情を抱いたし、又、

(さすがは、やはり名門の子である。二十年の臥薪嘗膽、よくぞした)

と、彼の系圖を革めて思ひ起し、それに崇拜の念さへ加へて、先頃から寄るときはるし、源氏方、平家方と稱び分けた通り言葉で、うはさに持ちきつてゐる有様だつた。

その頼朝が、一敗地にまみれて、行方も知れない——と傳つて來た時、はつきり世間に現れた事は、この地方でも、若い人の層に、一様に濃い落膽が見えたことだつた。

間もなく、

(佐殿は、安房か下總の邊へ、落ちのびて來られたといふ噂だぞ)

と知れ渡ると、俄然——といつてもよい程、この房總一帯も、人間の顔いろ、人々の眼、話題、生活の仕様、殊に若い層のうごきが活潑に變つて來た。

が、こゝにもある古い勢力や秩序が、それとは反對な衝動から、

『落武者を入れるな』

と、各々の地盤を、守り固めて、極力、この颱風から遁れようと努めた。

寒川、五反保を濠として、その郭内に、侍屋敷の門をならべ、丘の猪ノ鼻臺に、一族の館を持つてゐる千葉介常胤なども、當然、さうであつた。

宿人町から郭内へ通じる橋口に番兵が立ちだしたのも、その現れの一つと云へよう。長元年中、關東の騒亂に功のあつた平忠常以來、累代平家の御家人であり、この地方の豪族として、現状のまゝである事が、最も安泰を希ふところの家柄であつた。

『はてな、怪しい旅商人だ。これで三度こゝを通るが？』

『引ッ捕へてみる』

橋口の守りの武士が、かう指さすと、その指を振向いた旅商人は、急に足を早めて、町の方へ曲つてしまつた。

二

千葉介常胤の次男胤頼は、何處からか歸つて來て、今、濠内へかゝらうとすると、橋口をふさいで番の武士十四、五名が、何か騒いでゐる。

『おい、何事だ』

胤頼は、馬上から聲をかけた。

すると、武士たちに圍まれて、それへ引据ゑられてゐた旅商人は、

『おゝつ』

と、彼を振向いて、跳び上らないばかり欣んだ。

胤頼には、ちよつと思ひ出せなかつたとみえ、

『何者だ』

と、近づいたら鞭で打ちすゑさうな姿勢をした。

『それがしです。お忘れか』

『……それがし？』

と、擬と見直してから、初めて姿の變つてゐる事に氣づいたらしく、

『やあ、藤九郎盛長どのか』

と、眼をみはつた。

曾て、その藤九郎盛長は、頼朝の召状を携へて、此館を訪れたことがある。その時、父の常胤は會はなかつたが、胤頼は兄の胤正と同席で、彼を迎へたことがある。

『無禮すな！』

胤頼は、武士たちを叱つて、

『よく何事もなかつたものだ。このお方が本氣になつて抵抗つたら、其方共が十人、二十人、かゝつても、濠の水を呑んだらうに。——さて、無事であつたは、寔に御堪忍のお情、辱ない』

と駒を降りて、慇懃に挨拶をし直してゐる様子に、橋守の武士たちは、この旅商人、一體何者かしらと、首を傾げ合つてゐた。

『いや、落度はそれがしにある。取次を願つても、かれ等の今の境遇では、尋常にお通しあゝるまいと、あなた様か、胤正様のお出ましを待たうと、うろついてゐた爲、疑はれたのでござる』

『何にしても、こゝでは、お話しもならぬ。館まで、お越し下さい』

胤頼は、駒を、侍の手にあづけて、旅商人姿の盛長と、肩をならべて歩み出した。

落着いてから訊くべき事と思ひながら、その間も待ちどほしげに、胤頼は、歩きながら言葉

短かに、もう訊きほじつてゐた。

『御無事か。佐殿には』

『は。天祐といひませうか、おつつがもなく』

『して、今は何處？』

盛長は、後を見た。供の侍たちは、ずっと後から、胤頼の駒を曳いて來るので、

『安房にをられまする』

『安房とは、およそ世間も觀てるが……安房のどこに』

『安西三郎景益どの、計らひで、その邸に近い寺院を隠れ家に』

『ウム。北條どのは』

『御一緒です』

『さうか、それ伺つて安心いたしました』

『實は、この度も殿の御密書を帯びて使に來たわけでございますが』

『それは』

と抑へて、

『後で悠々伺はう。——何よりもお詫びせねばならぬ事は、去年、ことしの春と、二度までも、令旨のお沙汰と共に、佐殿の召状にも接しながら、何の御返事も回さなかつたわれ等の無禮のかどです。……お察しく下さい』

『いや、その邊の御事情は、よく分つてをりまする。……千葉御一族にとつても重大な分れ目でございます。ましてや、あなた様や胤正様の上にも、お父上常胤様といふ者がおありなのですから、左様に、手軽く向背を決めるわけに參らぬのも、決して御無理とは存じません』

二人の影は、寺院の登り口でもあるやうな、森の木蔭と青苔に蔽はれた石段を踏んでゐた。

三

『とにかく、會ふだけでも、お會ひになつて下さい』

胤正、胤頼の兄弟は、結束して父にせがんだ。——議論もし、情にも訴へ、口を極めて頼んだ。

『それ程に申すならば』

と、父の常胤も、たうとう承知してしまつた。

兄弟は、雀躍りせんばかり欣んで、やがて、頼朝の密使、藤九郎盛長を導いて來た。

盛長は、胤頼の館で、すつかり装束を着更へて出た。——意地わるい眼で、その言語動作を

見つめてゐた常胤も、

(よい侍だ)

と、心で呟いたふうだつた。

『初めてお目通りを得ます。自分事は、源家の棟梁故義頼様の御嫡男、頼朝様の家人でござり

まして、藤九郎盛長と申します者』

と彼の殷勤を、

『左様であるか。儂が、千葉介……』

と、一方は、至つてあつさりとする。

藤九郎、一目見て、千葉介が氣さくな老人であることを知つた。年は、當年六十四と、さつき

胤頼から聞いてもゐた。

味方の北條時政などは、また老人といふほどな老境でもないせむか、多分に垢ぬけない所だ

の、我意我説だの、私慾なども旺盛で、よく若い者と衝突はするし、俗にいふかどの取れない

所が多分にあるが——この老人は鶴のやうだ。それでゐて、頬には赤味をたゝへてゐる。ここ

やかで、感じがよい。

『京都へ參られた事があるかの。京都はよいな』

そんな話からはじめた。

合戦がどうの、源氏がどうの、平家が——とそんな噂は、囁にも出さないのである。

藤九郎盛長は、足のしびれるほど、長い間、常胤の世間はなしを聞かされた。

都の女から、戀歌をもらつたりした事のある若い時代の秘め事まで、おもしろげに云ひ出す

のであつた。

『時に』

幾度か、改まつて、口を切り出さうとしたが、外らされてしまふ。

そのうちに酒肴が出た。
猶いけな。

宴がすゝむと、孫たちから、家人の某、某、某——と次々に出て来ては、

『さあ、お寛やかに』

と杯をすゝめた。

盛長は、元來が武骨者である。行儀も長持ちはしないので、もう臍をきめた。まゝになれと
寛いで、大いに飲み出した。

千葉介も、微酔のよい機嫌になつて、

『それでこそ、坂東武者よ。どうも、最前はまだ、佐殿のお使とはうけ取れなかつた。——世も革まつて、新しい泰平となつたら又、ずるぶん平家衆のみやびもお眞似なされぢやが、きのふ今日、伊豆を這ひ出た坂東者や若人が、今から人の顔いろばかり恐れてゐるふうでは、ちと心もとない。……さあ、さあ、存分に、こよひは飲んで』
と、鼓など取寄せて、女たちに打たせた。

老人は、何もかも分つてゐる。——あの言葉の様子では、頼朝様の書面も受け取つてくれる
氣持にちがひない。

盛長は、さう感じたが、

(待てよ、さうして、自分の爲體を見、ひいては、源氏の輩が、どんな土風か、どんな者の寄
合か、試みてをられるのかもしれない)

とも、密かに警戒した。

警戒しながら、彼は、大膽に飲みつぶれて、そこに眠つてしまつた。

海が近いし、しかも夜は秋、丘の上の宏莊な豪族の館なので、寝ごころは實に快い。

『……盛長どの。盛長どの』

もう深夜。胤頼が、ゆり起してゐた。

『そつと、奥の間で、父がもう一度、誰も交へず會はうと仰つしやる。お越し下さい』

上首尾と、盛長は、血のをどる思ひがしたが、

『しばし御猶豫を』

と、庭面へ下りて、流れに嗽ひし、髪をなで、衣紋を直してから、従いて行つた。

一六二

鎌倉へ

「いつ迄かうして、安房に凝としてゐても仕方があるまい」

頼朝は、焦心つてゐる。

いつ迄——と云つてもまた安房に上陸してから、半月程にしかならないのであるが、頼朝に取つては、永い氣がした。

毎日を無爲に過してゐる間に、刻々、眼前の機會が、逃げてゆく氣がしてならない。

然し、その半月の間も、決して手を拱いてゐるわけではなく、下總の千葉常胤の所へ、藤九郎盛長に密書を持たせて遣つたやうに、同様の書面を、八方へ送つて、

——旗下に馳せつけよ。

——志のある輩は、みな伴れて來い。呼びかけて來い。

と、味方を募つてゐた。

小山四郎朝政。

下河邊行平。

豊島權守清元。

葛西三郎清重——などといふ顔ぶれの所は、それ／＼源氏にゆかりのある者、脈があらうと期待されてゐた。

中でも、葛西清重からは、逸はやく返辭が來たが、

(江戸、河越などの平家方に睨まれてゐるので、参るには参るが遅くなる)と嘆いて來た。

頼朝は、又すぐ返書を送つて、

(陸路がむづかしければ、海路を渡つて來い。時逸しては、千載までの恨事を遺さうぞ)

鎌倉へ

一六三

と云つて遣つた。

それほど、彼の胸では、事を急いでゐた。——お味方申さうと云つて来た上総介廣常からも言葉だけで、今以て迎へが来ないのである。

「時政」

「はつ」

「こちらから上総へ出向かうではないか。こんな僻地にゐては、馳せ参する者共も不便だ」

「——が、もう暫く、お待ちなされませ。當所の安西殿が今は旅先にあつて、留守でもござれば」

「安西三郎の庇護の下に、かうして半月の餘を過しながら、無断で去つては悪いが、一日遅ければ一日だけ、味方に利といふ事はない」

「それにしても、まだ下総へ参つた藤九郎盛長も歸らず、その他、諸豪の動向もよう分らぬうちには」

「お許、何を云ふ」

軍事を語る時の彼は、時政だからとて勇御と崇めてゐなかつた。

「諸豪のうごきと、よく云はるゝが、今となつては、誰が参らずとも、何者が敵と立たうとも、頼朝の方針に變りあらう理はない。たとへ身一人となつても、突き進む以外の道を、頼朝は知らぬ」

この頃の彼は、云ひ出したら背かなくなつた。旗擧げ以後——殊に石橋山以來、彼の温容な貴公子風は、すっかり強靱な皮膚と信念に固められて、時によると、時政でも土肥實平でも、頭から叱りつけたりする。さうした烈しい叱咤は、以前の彼には、まったく無かつたものである。

「——では、大勢は人目立ちますれば、五、六騎ほどお連れ遊ばして、密かに、お體だけを先にお移しあるおつもりで、上総介の館へお越しあつては如何でせうか」

時政も、遂に、妥協してさう云ひ出したので、何分にも蟄伏してゐる退屈にたへない頼朝は、その夜のうち假住居の寺院を立て、安房から上総路へ向つた。

二日目の晩である。

鎌倉へ

然るべき家も見當らないので、大きな沼の畔りの百姓家に泊てもらつた。すると真夜中に喊の聲だ。——供についてゐた三浦二郎義澄は旅装も解かず、裏の藁小屋の柱に倚りかゝつた儘、不寝番してゐたので、すぐ駈け出して見た。

何者か、およそ六、七十人、中には騎馬の影もある。此家を遠巻きにして、わあッわあアッ騒いでゐる。——そして大した弓勢ではないが、旺に、矢を送つて來た。

二

この邊に住ひ、長狭六郎といふ平家の侍が、夕方、頼朝の泊つたのを嗅ぎつけて、
「降つて湧いた幸運」

とばかり、頼朝の首を取りに、夜襲して來た者だつた。

三浦二郎義澄は、

「殿つ、お目ざめ下さい」

と、家の中へ呶鳴つたが、物音がしないので又、

「各々つ、各々つ」

と、裏口から起した。

起きて騒ぎ立てゝゐるのは、此家の百姓の家族ばかりだつた。嬰兒の泣き聲やら、老人のわめき聲が、外の矢うなりにつゝまれて、哀れに聞えた。

「主つ、驚くな。外へ出るな。泣かずともよい。おまへ達は、一間にじつとしてをれば怪我はない。——が、殿と侍たちはどう、召された」

義澄が、早口に問ふと、

「お客方は、あれに」

と、嬰兒をかゝへた女房が、啞のやうに、舌を吊らせて、わくわくと指さした。裏の畑の地先は、すぐ沼の汀だつた。頼朝はもうその小舟にかくれてゐた。

「義澄つ、はやく乘れ、捜してゐたのだ」

「あつ、殿ですか。——そのまゝ殿こそ早く岸を」

「乘れと申すに」

「いや、殿軍します。對岸の部落でお待ちください。それがしは陸路をまはります」

云ひ捨てると、義澄はもう敢然と、家の前の往來へ出て、近づく敵と斬りむすんでゐた。

「義澄を討たすな」

と、頼朝のそばから、二人立ち、三人立ち、五人まで馳け上つて行くと、

「みんな来い」

と、頼朝まで、跳び上つて、遂に敵へ當り始めた。

敵は、六、七倍の人数だが、當つてみると、案外弱かつた。いや、此つ方の皮膚や精神が、

伊豆でさんく鍛へられて來てゐるので、さう思はれたのかも知れなかつた。

「追ふなく。深入すな」

五、六町先まで、追ひ崩して、頼朝は引つ返して來た。

「此家の百姓を宥つてやれ」

と、頼朝は、持合せの物など與へて、夜の明けないうち、小舟で沼を越えた。

翌日。

安西三郎景益は、頼朝が立つたと聞いて、近くの旅の途中から、遽に道を更へて追ひかけて來た。そして、

「行く先々、前夜のやうな狼藉者や、この際、何とか平家の恩賞にあづからうと、慾にかゝつてゐる者も無數にある。輕忽なお旅は、危険極まるものでござる。すぐお引返し遊ばされますやうに」

強つて諫めたが、

「前へ行く道のみが何うして危いと云ふか。後へ退く道が必ず安全と何うして云へるか。さう考へるのは、まだ平常に囚はれてをる其方の觀念だけのものだらう」

頼朝は笑つて肯かない。

ぜひなく、彼も供に加はり、かくなる上は、とその由を、安房へ報じて、北條時政やその他の人々へ、

(途中で待つ。急いで御参加あれ)

と、云ひ遣つた。

時政以下の者は、安房を引拂つて、追ひついて來た。總勢こゝに三百餘人となつた。——ちう忍びの旅とはゆかない。公然たる源氏の出動だつた。安房に上陸して以來、初めて「軍」としての歩みを開始したものだつた。

武器、武裝、元より完全ではない。三百の小勢は、まったく心もとない人數にちがひなかつた。

然し、頼朝が背かないので仕方がなかつた。時政も晴れない顔であつた。この時ばかりは、彼の老練な思慮も用をなさず、たゞ頼朝の強情と若さに引つばられて、せひなく歩いてゐるといつた姿であつた。

——ところが、前に千葉介の所へ使に行つた藤九郎盛長が、下總から歸る途中、頼朝の出動を聞いて、これへ尋ねあてゝ來た。

待かねてゐた頼朝は、盛長が歸つたと聞くと、すぐ招いた。

「千葉介が返答はどうであつたか。——應か、否か」

「御書の趣き、承知とお答へでした。最初は、難かしいお氣色に窺はれましたが、御子息方が、舉つてお味方あるやうと、此方を御支持くださいました爲、さしも常胤殿にも、遂に、御加擔申さうと、お約し下されました」

「さうか」

頼朝の胸は、どつと鳴るほど、歡びに開けたに違ひなかつた。然し、さう一言、唇をむすんで云つただけだつた。

盛長は、猶、復命をつゞけて、

「——又、常胤殿が仰せには、安房、上總、何地にしても、佐殿がをらるゝ御宿所として要害とは申されぬ。すこしも早く、旗をすゝめて、相模の鎌倉にお據りあるが上策かと考へらるゝ……との事でござりました」

「鎌倉へ」

彼は、天來の聲でも聞いたやうに、眸をあげて、

「鎌倉へ。ム、鎌倉へとか」

と、何度も呟いた。

それから盛長に、大儀であつた、休むがよいと、構つて、自身は、時政や其他の將を集めて評議し始めた。

評議の結果、急に、軍の方向が變つた。

こゝまでは、

「上總介廣常の館へ」

と、それが目標であつたし、次の行動にかゝる根據地と目されてゐるが、頼朝は、その方針を一變して、

「鎌倉へ進まう」

と、こゝで云ひ出したのであつた。

「鎌倉は源氏發祥の地と申してもよい。——御冷泉院の御宇安部貞任を討ち鎮められた後、祖

先源頼義朝臣は、相模守となつて鎌倉に居を構へられた。——長子の陸奥守義家朝臣もをら

れた。——鶴ヶ岡八幡宮は、庚平の秋、御父子が奥州征伐の御祈願に、石清水を勸請なされ

たのがその縁起であるやに聞いてをる」

やゝ迷ひの見える諸將の顔色を見まはしたが、頼朝は、自分の熱意を押しつけるやうに、猶も、説いた。

「頼義公の威徳は、當時、坂東の武夫共がみな慕ふところであつた。民は歸服し、弓馬の門客は、常に諸方より鎌倉に往來して、公に接するのを名譽にしてゐたといふ。よく士を愛し、施を好むお方だつた。嫡男の八幡太郎義家公については云ふまでもない。——それやこれ鎌倉こそは源氏に由縁の深い第一の地と思ふ。——要害の點も、此地方とは、比較にならぬ」

口を極めて、彼は、鎌倉を主張した。いや、その何れにするかを、諮つてゐるのではない。自分の信念を、諸將にも、自分と同じ熱意まで信念させるために、云つてゐるのであつた。

鎌倉と聞いて、誰も皆、

鎌倉へ

『なるほど』

と、その有利なことや、源氏にゆかりの有るといふ點など、異存はなかつた。けれど、頼朝の云ふのを聞いてみると、頼朝は、そこに據ることの上策であることのみ極めこんで、こゝからここまで進軍してゆく事のいかに至難な業か——可能か不可能かも、まるで考慮してゐないやう見うけられた。

實際、頼朝は考へてゐなかつた。この際、考へてなごらたら一步も進む地はないからである。彼はたゞ、良い！ と信じ、行かう！ と思ひ立つた方へ指さした。——そして、

『來る者は、われに従つて來い』
と、他を云はず、三百餘の兵の眞つ先に立つた。——鎌倉へ、鎌倉へ。道を更へて、海沿ひに出て進んだ。

隅田川

一

そのまゝ頼朝の人数が、下總の國府までかゝると、千葉介常胤は、胤正、胤成、胤道、胤頼などの子息たちを初め、一族郎黨三百餘を従へて、迎へに出てゐた。

『手みやげのしるしに』

と、胤常は、頼朝との見參に、一名の捕虜を曳かせて來た。

『これは、何者か』

頼朝が、訊ねると、

『千田判官代親政と申し、當國千田庄の領家でございます。平忠盛が聲にもあたれば、お行先を遮るは必定と、こちらから機先を制して襲せかけ、その折、孫の小太郎成胤が、生捕りました』

者でござる」

老人は誇らしさうに云つた。

「その孫は、いづれに？」

胤常の誇りに花を添へてやるやうに頼朝が訊ねると、

「小太郎、小太郎」

と老人は、孫の成胤をさしまねいて、頼朝の見参に入れた。

まだ十六、七の若者だった。頼朝は、平治の亂に、自分たち兄弟が初陣に立つた時を思ひ出

すなどと語つて、次々に、胤常老人の子息を近くへ招いて、

「みな、あつばれな面魂。競つて家名を揚ぐる事であらう。行末、頼朝も目をかけて進ぜる

故、老臺に御安堵あるがよい」

と、云つた。

わづか三百の小勢をひいて、まだ據る所も持たない漂泊の亡將にしては、その言葉は、ずる

ぶんだ言であつたが、胤常は、むしろその大言を頼母しく見上げて、

「子息も、孫共も、擧げてお預け申すからには、如何やうとも、お引廻し下されませ」と主従の約をつがへた。

その日、千葉城からは、頼朝の軍勢一同に、辨當を贈つた。

行軍の將士は、それを野外で開きながら、久しぶり飯の味を嗜みしめた。——こんな飯を今

日こゝで味はうとは、豫期しなかつた所である。——或る者は、

(けふ下總へ入つたら、早速に合戦とならうも知れぬぞ)

と、弓絃を調べたり、足拵へを確めて來た程だった。それ程、千葉一族が味方に加はるとい

ふ事も、こゝへ來てみる迄は、まだ半信半疑だったのである。

將士でさへ、さうであつた程だから、顔に出さない頼朝の歡びも、内心はどれほどだったか

分るまい。——その歡びの溢れが、云はせたのであらう、頼朝は、その夜、猪鼻臺の館の鑿

突に臨んだ時、常胤の手を取つて、

「何だか、自分までも、あなたの子息の一人かのやうな心地がする。以後、貴殿を以て、父と

も思ふでござる」

と、云つた。

さう云はれた常胤は、頼朝の世辭とは思ひながらも、

『よい息子が又殖えた。日本一の息子どではあるまいか』

と、心からほく／＼したが、頼朝の側にも北條時政は、何か、嫌な顔をしてゐた。——同じやうな巧い言葉を、曾て、頼朝の口から、自分もうけた事があるので、それが思ひだされたのである。

城内に、一夜泊つて、十八日の朝、頼朝はこゝから出發した。

すると、館の出口に、紺村濃の直垂に、小具足を付けて、跪びてゐる若者がある。常胤の

息子でもなし、孫とも見えないので、

『あれにをる者は？』

と、頼朝が訊ねると、胤常は、待つてゐたやうに、その若者へ、

『近う。——頼隆殿、近う』

と、さしまねいた。

『これは、毛利冠者頼隆と申されて、あなた様の亡父義頼公の伯父君にあたる御方の遺子でお在せられる』

と、常胤は紹介はせた。

亡父義朝の伯父で東國にゐた源氏といへば？——頼朝はハタと膝を打つて、

『さては、陸奥六郎義隆が子か』

と、思ひ出して云つた。

『はつ』

と、逞しい若者は、答へて、頭を下げた。

『忘れもせぬ……』

と、頼朝は呟いた。

『平治の合戦に、父義朝は敗れて、都を落ちたが、その折、叡山の北の龍華越えのあたりで、

追ひ来る敵へ馳け戻し、亡父義朝に代つて戦死したは——お汝の亡父、六郎義隆殿でおはした。……その年、ひとりの遺子は、生れてまだ五十餘日と聞いてゐるが、さては、その折の嬰兒が、お汝であつたか』

「永暦元年の二月、私が二歳の春、この下總國へ流されて來ましたが……常胤様のお情によつて、密に、けふまで養はれて参りました。——そして今日、源氏の御旗の下に、かうして、あなた様のお姿を拜し……欣しくて……何か夢のやうで』

と、二十歳ばかりの多感な武夫は、感極つて、後は両手をつかへてゐるだけだつた。

「常胤。ようぞ長い間、この孤兒へ慈悲をかけ賜はつたの。わしからも禮をいふぞ。——いざ立たう。頼隆も從けや』

彼は、館から歩み出した。猪鼻臺の丘を大股に下つて行つた。

追ひかけ、先立つ武者たちの物の具が、秋の陽に燦々する。城門のほとりや郭内の侍邸の並んでゐる辻々には、たくさんの見送り人が佇んでゐた。

武者が、旗を振つて來るうしろから、頼朝を眞ん中に、常胤の一族や、北條時政や、諸將の

姿が見えて來ると、辻の人影はみな大地にうづくまつた。——そして、頼朝の顔を見た者はなく、わづかに、力づく運んで行たくさんの武者草鞋の中に、

『あれが、もしや？』

と、思ひ寄せて見ただけであつた。

陣員が旺になつてゆく。

頼朝と常胤の兵を併せると、總勢七百からの行軍になつた。たゞ一色の源氏の白旗についで、千葉家の月輪の紋じるしも幾流か翻つてゐた。

この日を、味方の數の殖えはじめとして、半日の間に、千を越えた。

『千葉殿が御加勢あるからには——』

と、五人十人づつの、小さい仲間も俄に馳けつけて來るし、その前に、頼朝から召きの書狀が飛んでゐる葛西領、豊島領あたりの僧も二十、三十と郎黨を率きつれて、途中から加つた。

——鎌倉へ！

——鎌倉へ！

次第に全軍の足なみは大きくなつた。そして、武總の堺、隅田川河原まで来た頃は、その河原で、待ち合せてゐた者や、海のはうから船で溯つて来る人数もあつたりし、一躍、二千餘騎の軍隊となつた。

その夜は、河原に陣して、思ふさま、人々は、秋の夜空をながめた。河幅は怖しく廣かつたが、水は渡渉できる程だつた。数日、残暑の汗によこれた肌着など洗ふ兵もあり、魚を漁つて、箒で焼いて喰つてゐる仲間もある。

——が、こよひにも、武總の地にある平家が、いつ夜襲して来ないとも限らない。水が肅々として夜更けを告げるほど、歩哨の兵は眼を光らしてゐた。すると、隅田の宿の先まで、物見に出てゐた兵の二、三騎が、

『おういつ』

何事かあつたやうに、鞭を上げて、此方へ馳けて来た。

『大軍が来るぞ』

河原で馬を降りながら、物見の兵は、そこらに立つてゐる歩哨へ云つた。

『なにつ、敵かつ』

と愕く聲へ、答へもせず、その影はあたふたと、土肥二郎實平の宿營へ馳けこんだ。

實平が、時政を訪れ、時政が常胤を起し、中軍の箒は俄に明々と火の音をはせ、頼朝の座右には、すでに諸將のすがたが詰合つてゐた。

——これへ大兵が来る。

との報せは、次々に告げて来る者の口から、その装備、兵數、旗じるしなど、直ぐつぶさに知れた。

兵數は、およそ二萬餘と聞えた。

前に、頼朝が安房にゐた時、逸早く返書をよこして、

——お迎へに参向する。

と、味方を約し、落魄の頼朝を、第一に歡ばせてくれた上總介廣常の軍勢だつた。

といふ兵數を聞いたゞけでも、諸將の面上には、包みきれない歡喜が漲つて、

『ほ、ほう……』

と、眼をかゞやかした。

『この有力な大軍が、お味方に加はるからには』

と、けふの暁天から、源氏の運勢が革まるやうな思ひを誰も抱いてゐたのである。

その朝空は、隅田川の水ひとつに、うつすらと白みかけてゐた。

廣常の大軍は、隅田の宿あたりを境に、河原から野へ互つて、雲のやうに、止まつてゐた。

そして夜明けの光りを見ると、その中軍から、緒ら顔で髪の眞白な老将が、一門の騎馬武者

たちに圍まれ、二十名ほどの兵卒を先驅として、ゆるやかに駒をすゝめて來るのが見えた。

『オ、上總介殿が來られる。御あいさつに見えられる』

頼朝の營外に立つてゐる兵たちは、小手をかざしながら、新しい味方の堂々たる威風を、頼もしげに眺め合つてゐた。

四、五の將も、そこへ出て、

『道を開け。その駒の群を、彼方へ移せ』

などと指圖してゐた。

廣常は、間もなく、陣所へ近く來て、ゆらりと駒を降りた。——そして士卒を遠く立たせ、

嫡男以下の肉親だけを従へて、幕の近くまで進み、

『これは上總介廣常でござる。一族、近國の輩など狩り催し、二萬餘の同勢をひきつれ、たゞ

今あれに到着いたしました。この由、佐殿まで、お披露なねがひたう存する』

朝露に濡れた陣の幕は、雨に晒されたやうに重たげに垂れてゐた。——廣常のことばをその

まゝ傳へて、武士は、頼朝のすがたの見える幕の下に踞いてゐた。

『…………』

いつ迄も、頼朝が唇をむすんでゐるので、邊りの將たちは、彼の面へ眸をあつめてゐた。大

河の水の前に夜明けの光りの白々とした下に見ても、その面は、配所にゐた頃とは、別人のや

うな黒さと強靱さを見せてゐた。

「畏れながら、お耳へ達します。たゞ今、上総介廣常殿には、二萬餘騎をお味方にひきつれ

……」

再び、取次の武士が云ひかけると、石橋山の谷間以來、久しく聞かれなかつた頼朝の大聲がいきなり、

「ならぬつ！ 追ひ返せ」

と、大喝した。

幾條もの幕の彼方に、かなり距てゝはゐるが、その聲は、上総介のゐるあたりへも、十分に届く聲量であつた。

「頼朝が安房より進軍してから、はや幾日になると思ふ。その間に、合戦あらば、二萬十萬の兵とて、間にあはぬ味方だ。——遅れ馳せは、武士の第一に忌むところである。左様な者は頼朝と事をするには足らぬ。目通りはならんつ、疾く歸れと云へ！」

四

主従の隔てはべつとして、頼朝とは一心同體と信じてゐる人々にも、頼朝のことは、實に思ひまうけぬ事だつた。

千葉、土肥、北條など居あはせた諸將は誰もが皆、ハツと顔色を變へずゐられなかつた。

第一に恐れた。

上総介廣常の耳へも聞えたであらう事を。

第二には憂へた。

せつかく味方に來た二萬の軍勢が、爲に、離反して行くことを。

第三には、疑つた。

頼朝の頭腦を。怒りを。

そして、茫然の裡に、やゝ呆れ氣味さへ湛へて、頼朝の怒つてゐる——ほんとに怒りきつてゐる苦々しげな面を——生唾のんで見すゑてゐた。

正當だ！

これでいゝのだ！

岡田川

大喝を發して、ぼつと熱した耳朶をしながら、頼朝は大きく唇をむすんだまゝ、自分の胸へ自分で云つてゐるやうに黙りこくつてゐた。

幕の裾から倉皇と退つて行つた取次の武士は、陣外に佇んで案内を待つてゐる上總介へ、主君のことばを、その儘、傳へるしかなかつた。

『寔に、お氣の毒な仕儀でござるが』

云ひ難さうな口吻で、さう傳へかけると、廣常は、もう聞いてゐたのであらう、

『御機嫌がお悪いやうでござりますな。御不興を蒙つたかどは、幾重にも、廣常が落度相違ござりませぬ。——自身、御前に罷り出で、篤とお詫びいたさねばなりませぬ故、もう一度お目通りのおゆるしを賜はるやうに、左右の方々へも、お取做しの儀願ひ入りまする』

と、頭をさげた。

辭色も靜で、丁寧には云つてゐるが、上總介廣常も、土のやうな顔色をしてゐた。心のうちの穩かでない事は當然わかる。

二萬の兵をつれて、子や孫や一族共まで語りひ、こゝへ見參に來ながら、頭から今のやうに

叱りつけられて、何でそのまゝこの陣門を退がられよう。老将が、この年まで覺えない恥をかへ感じたにちがひない。——身も顫へてくる、侍の面目をじつと嚙んで躁ぐ心を踏み休へてるにちがひなかつた。

『……では、暫時』

同情にたへないふうである。武士は又、幕營の奥へもどつて行つた。

その姿が、隠れるとすぐ、

『ちッ、父上ッ』

『大毆ッ』

『席常毆ッ。かつ、歸らうッ』

彼のそばにゐた子息や一族の誰彼は、左右から彼の手や鎧の袖を引いて、憤然と促した。

『な、なんだつ、千にも足らぬ小勢を引いて——。伊豆に敗れ、辛くも安房にのがれて、漸く千葉が組したので、形ばかりの軍勢となつた迄の佐殿ではないか。——ちと、慢じてゐるつ。さ、さつ、廣常殿、戻りませう』

同じ年配に近い同族の老人さへかう云つて齒がみをする、猶更、子息や孫の若武者輩は、もう敵として立つ決意さへ眸に研ぎたてて、

「佐殿が何ぢやツ。今の大聲を聞けば、思ひ上つた阿呆に近い。あんな大將に、何で大事がならう。こんな陣門へ禮を執つて來ただに口惜しい限りぢやわツ。——さつ、引つ返さう！ お祖父様」

「父上つ」

と、動かぬ廣常の體へ寄り集つて、無理にでも、引き戻さうとした。

「……………」

が。廣常は動かない。

そのうちに又、頼朝の座所から前にも増して烈しい聲がながれて來た。

「——ならぬつ。いらざる取做しをいたすなつ。追ひ返せと申すに！」

廣常の身をつゝんでゐた一族の輩は、その聲を洩れ聞くと、くわつとなつて、

「うぬつ」

一齊に、陣刀のつかを掴んだ。

「何をするつ。推參な」

廣常は、叱りつけると、何う考へたか、それへ坐つて、両手をつかへないばかり身を慎んで見せた。

五

二度、三度まで、取次の役目に立つた者は、廣常と頼朝のあひだを往復したが、頼朝の怒りは依然解けなかつた。

三度目には、餘り氣の毒と思つたか、取次の者と共に、土肥實平も出て來て、
「けふは一先づお引取あつて、他日、再度御見參に出られては如何でござる。その間に、われわれよりも、御氣色を窺つて、よくお取做しいたして置きませう程に」

と、慰めた。

然し、廣常も亦、辛抱づよく、これほど迄に叱られながら、猶も、大地に坐つたまゝ起たう